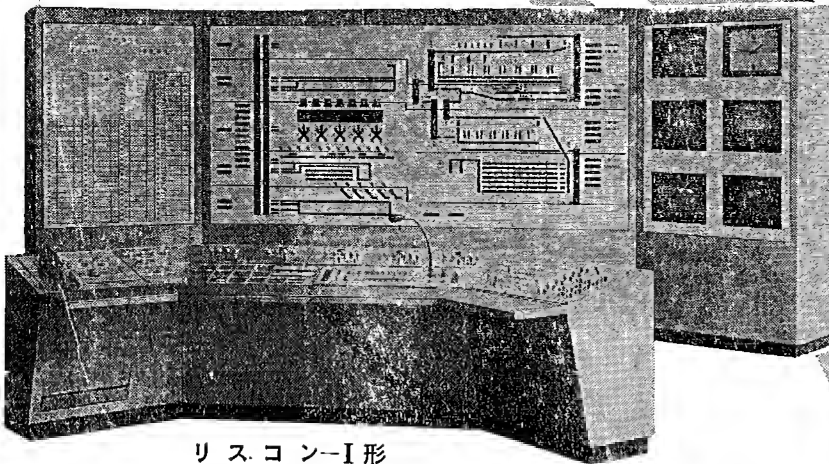
Osaki

営業品目

普通電力量計	電流制限器
精密電力量計	配線用しゃ断器
誘導形自動電圧調整器	配電盤・分電盤・制御器
静止形自動電圧調整器	試験用変圧器
配電線事故捜査器	各種開閉器・しゃ断器
需要電力量遠隔測定装置	数字式テレメーター・データロガー
電力需給用計器用変成器	標準用計器用変成器



リスコン—I形



大崎電氣工業株式會社

本社及び五反田工場	141	東京都品川区東五反田2の2の7 電信略号 シナガワ」デンキ	電話 (03)443—7171(大代表)
蒲田工場	144	東京都大田区多摩川2の8の1	電話 (03)759—6511(代表)
埼玉工場	354	埼玉県入間郡三芳町藤久保58	電話 (0492) 58—1205(代表)

ミユンヘンへの道

ミュンヘンを目指す候補選手25名が決定した。アジア予選を勝ちぬいた16名に学生を主体とした若手9名が加わり、25名となった。

この25名がこれから、7ケ月の間に強化を重ねミュンヘンでの上位入賞を狙うことになる。

アジア予選は結果的に見れば、快勝であったが、一つの試合の細かな局面々々をとれば、決っしてそう楽観できるものではなかった筈だ。

アジア予選を勝ちぬいた選手達また新たに加わった選手達もこのことは熟知している筈である。

ミュンヘンでは、まさにこの危ない局面の連続ということになろう。気のぬける瞬間は全くないといっても良いであろう。

地理的にいって、対戦相手にもめぐまれず、本場のニュースからはるかに遠ざかっている我が国でヨーロッパ諸国のミュンヘンをめざしての熱情を感じとれといってもムリかもしれない。

しかし、それを克服しなければ日本の上位進出はありえない。

今後の7ケ月間、候補選手はまず眼に見えない敵よりも、どんな苦境をもはねかえす力強い意志と体力をもち合わせてほしいものだ。そして、ミュンヘンの会場では、自分のもっている力を十二分に発揮できるという自信、決っして過信ではない自信を養ってほしいものだ。

全国のファンがあれだけの声援をし、アジアの代表としての君たちに期待をしているのだ。

選ばれたということを誇りにしこのファンの声援に応えるべく、十二分の心構えをもって、誰が見ても納得できる試合振りを個人としても、チームとしても、ミュンヘンで見せて欲しいものだ。

ここでいきなり金メダルをと力んでみても、カライバリにしかならない。誰もが納得できる試合をすれば、金とは云わないまでも上位入賞は可能である。

体調を整え、今後の7ケ月間に長所は伸ばし、短所は補ない、晴れのオリンピックで、多くの先輩たちが果せなかったオリンピックの試合に参加する栄誉を十分にかみしめ、精進してほしい。

日本のファン・アジアのファンが期待しているのは、ヨーロッパ以外のチームの上位進出である。

残念ながら、女子チームはその希望をかなえられなかった。世界選手権よりもオリンピックという晴れの舞台でそれをかなえて欲しい。それが世界のハンドボールをも発展させるのだ。

（藤本）

時　評

成長度が高まるにつれ新しい問題がおき、新しい発展がなされる。

〝登録〟についてもそれがいえるだろう。

昭和10年代は東西の大学はチーム一つ一つに加盟団体という資格が与えられていたそうだ。

現規約で加盟団体といえば全日本学連、全国高体連、全日本実連、全日本教職員連、全自衛隊連の5大系統を指す。

組織や加盟団体の成長は〝登録〟面でさまざまな問題を提起している。特に社会人チームの構成について斯界ははっきりとした線がない。

実業団に関しては全日本実連にまかせ、クラブは各ブロックの見解をそのまま適用しているだけだ。

全日本実業団選手権やクラブ大会などはそれでもよいだろうが、今後全日本総合選手権などで釈然としない問題が生じるのではなかろうか。

例えば実業団（会社）に在籍しているいわゆる勤労学生が学連登録者であった場合。現実に会社と学校でハンドボール活動を両立させることは不可能に近いが規程上は「ＯＫ」。

またクラブの構成にもさまざまなケースがある。

学連や実連登録者を認めている地域もあるし、まったくそうした者を除外している地域もある。

周囲の条件がからんで一線を引きにくい難題ではあるが、この際大会毎に細則を成文化し、少くとも登録上でトラブルがおきないような手だてを講じるべきかも知れない。

しかし、万全を期しても〝抜け道〟はどこかにある。規則でしばったがために内容低下も起こるだろう。

要はチーム側の〝良識〟にかかることなのだ。

現在、国体（一般）に学生の出場は許されず、女子は1チーム3名までとされている。この場合の学生とは大学ハンドボール部員だけに留らず学生という身分を有する者すべてという注釈づきである。

なぜこうも厳しいのか。かってある県が国体での成績を考えるあまりその春大学に進んだ学生を国体終了時まで因果をふくめてハンドボール部に入れさせないでおいた〝事件〟があったからだそうだ。

フェアーをモットーにしたスポーツ団体にいくつも〝規程〟があるなどというのはあまり聞こえのよくない話ではある。

（Ｘ）

ミュンヘンへ新たなスタート

オリンピック候補選手25名を発表

オリンピックイヤーが明け、今夏8月の「ミュンヘン」へ新たな一歩を踏みだした日本協会は1月19日東京で注目の「オリンピック候補選手」25名（社会人14、学生11）を発表した。候補選手は2月14日から1週間大阪で行われる第1次強化合宿を皮切りに〝上位入賞〟の宿願を追って強化練習をつづけるが、3月下旬までに15～20名にしぼられこのメンバーが「47年度ナショナル（兼オリンピック第2次候補）となる。なお晴れのオリンピック出場選手の選考などは日本オリンピック委員会（JOC）の最終指示を待って行われる。時日未定。

予選出場組はそつくり

昨秋のオリンピックアジア予選を快勝で飾った直後から、日本協会はミュンヘンでの〝上位入賞〟を新たな目標にかかげ、それまでのナショナルチームを解体、対ヨーロッパチームを基本線にした候補選手の選びなおしを行うことになり選考委員会（荒川清美委員長、村田弘、勝繁夫、安藤純光、渡辺慶寿、竹野奉昭各委員）を編成した。

同委は12月にはいって4回の選考会議を開き、各委員からリストアップされた36名の選手を中心に協議、24選手を選び出し、1月14日の月例常務理事会で1選手を追加、発表となったもの。

新候補選手でまず注目されるのはアジア予選出場組16名がそっくり〝再任〟されたことだ。

アジア予選4試合で74得点、27失点というケタ違いの強さを発揮史上最強のナショナルチームという定評を裏づけ、しかも各選手ともまさに円熟期。ミュンヘン行きの切符をもたらしたという点でも当然の成り行きであろう。

木野、近森、飯田は斯界で初めて公式国際試合出場の30試合ラインをこえ（注・木野、近森各33、飯田31）、攻防両面の柱となっている。

E・ホルルIHF技術委員長を驚嘆させた野田、貴重な左腕コンビ有永、新実、オールラウンドタイプへいちだんと進境を示す藤中、中井、技巧派の新進氷海、大江、ベテラン早川、東。負傷のいえたアタッカー斉藤の奮起も期待される。

コーチングスタッフから『誰がでても安心』と全幅の信頼を寄せられている下里、本田、大村のGKトリオも健在を示した。いずれも個性のあるプレーを誇り、国際的なレベルに達しているといえよう。

学生界の主力加わる

この16人に何人がプラスされるかは今回の選考の焦点であった。

44年9月に第7回世界選手権（フランス）の第3次候補21名を発表して以後、ナショナルチームの選手数はつねに20人以内にしぼられ「精鋭主義」「重点強化」が打ち出されていたのだが、さすがに今回は、ミュンヘンを目指して一から出直すという意識が強く、原則として今後、候補の追加は行わないということもあって予選組以外に名があげられた選手は20名をこした、と伝えられる。

その中からすでに年令的に峠をこした選手がまずふるい落とされたようだ。

また、今回の編成方針が今夏8月への即戦力という観点から大学1、2年生や高校界のホープたちも最終的にははずれ、10代は一人もいない結果になった。

ミュンヘンオリンピック候補選手

（兼47年度全日本男子候補選手）

▽GK（5名）				cm
下里	敏彦	25才	（熊本市商―大崎電気）	187
高橋	誠	22	（宇都宮東高―日体大4年）	180
馬淵	豊明	23	（関東学院―立教大4年）	179
本田	洋	24	（日体大―大阪イーグルス）	178
大村	久	23	（日体大―全日体大）	178
▽FP（20名）				
飯田	誠行	26	（同志社大―大崎電気）	188
有永	修二	23	（立教大―東京海上火災）	187
斉藤	光男	22	（日体大―群馬教員ク）	183
近森	克彦	26	（芝浦工大―大崎電気）	182
木野	実	26	（立教大―ワクナガ薬品）	180
東	一敏	26	（立教大―大崎電気）	180
早川	清孝	25	（日体大―ワクナガ薬品）	180
藤中	憲二	23	（日体大―大同製鋼）	180
中井	武三	22	（同志社大―大同製鋼）	180
氷海	正行	22	（明星高―日体大4年）	180
新実	俊夫	22	（桜台高―芝浦工大4年）	180
松岡	猛	20	（滝川高―日体大3年）	180
佐藤	要二	22	（清水市商―中央大4年）	179
荒井	正人	22	（明星高―法政大4年）	178
花輪	博	20	（中大附高―中央大3年）	177
高梨	豊	22	（明星高―三景）	174
佐々木	健一	21	（明星高―中央大3年）	173
大江	隆夫	22	（岩国工―芝浦工大4年）	172
野田	清	25	（立教大―大同製鋼）	168
浅原	俊治	20	（東海五高―日体大3年）	168

（身長順）

「ハンドボール」1・2月号（第94号）目次

【表紙写真】全日本総合選手権（12月・東京）（光島磯雄氏撮影）

このほか予選組とのレベル比較ナショナルプレイヤーとしての将来性などが検討資料にされた。

新候補のなかで興味深いのは学生界の主力8人が加わり、実業団選手は高梨一人に留った点だ。

実業団のスターはほとんどがすでにナショナル入りを果たしていることもあるが、質低下を云われながら学生界がいぜん〃全日本の温床〃として重きをなしているということにもなるだろう。

氷海に加えて佐藤要、荒井と学生界ビッグ・スリーの主将が揃ったのも話題。アジア予選直前に代表の座を逃した花輪のカムバックも目立つ。

佐々木、浅原のスピードとテクニックは定評があり、野田、大江、高梨、花輪らとともに〃日本戦法〃要員として貴重な存在だ。

松岡は大成が期待されている大型サウスポー。これで左腕は有永、新実、浅原、松岡と4人に増えた。

GKも馬淵、高橋誠の加入で顔ぶれはいっそう多彩である。

目立つ明星高クワルテット

25人を眺めて華々しいのは氷海、荒井、高梨、佐々木と明星高（東京）出身者が並んだことである。同校は、41、42年インターハイ・国体連覇という偉業をとげており4人は当時の立役者。鳴りもの入りで学生界、実業団界へ進んだ選手だ。

ちなみにこの4人のほか41〜42年に高校界の檜舞台で活躍した選手を拾ってみると中井（伏見工、41年国体3位）、新実（42年国体2位）、大江（42年国体ベスト8）をはじめ斉藤（富岡高、41年インターハイ）、有永（西宮東高、同）馬淵(同)、佐藤（42年同)、松岡(同)、花輪（同）と揃う。13人、半数以上である。

当時東西学生界のトップスターの座にあった木野、近森、飯田が41年秋にナショナルプレイヤーとしてデビューしたのを考えあわせると「41〜42年」がミュンヘンに興味深い符諜となっていることに気づく。

なお、近藤信行選手(大崎電気)の復帰は体力的な面で見送られた。

25人の選手は2月14日から大阪で最初の強化合宿を行い19日のTVマッチ（別掲）に出場、日本協会では3月末に15〜20人程度にしぼり、このメンバーを「47年度ナショナルチーム」とする予定だ。

新チームのデビューは4月のGW・ダンケルセン（西ドイツ）戦になるだろう（別掲）

コーチ陣に村田弘氏ら

コーチ陣については日本協会では、いちぢオリンピック対策部に一任の方向でいたが、候補選手の数が25名に及んだためとりあえず第1次（2月）、第2次（3月）の強化合宿は同部に2〜3名のコーチを加えて行うこととし、1月14日の月例常務理事会で次の5氏を決めた。

▽第1・2次強化合宿コーチ　村田弘（日本協会オリンピック対策部長、アジア予選監督）、勝繁夫（日本協会技術指導部長）、渡辺慶寿（同普及部長）、竹野奉昭（同オリンピック対策委員、アジア予選コーチ）、北川勇喜（日本協会技術指導委員）

なお、一部手なおしが予想されたオリンピック対策部は当分のあいだ現行スタッフ4名（村田、竹野＝強化担当、藤本、杉山＝情報担当）のままで進む。

選手の競争、精進を期待

ところで栄光のオリンピック代表だが、JOCの派遣最終決定がおりぬ限り具体的な動きはできない。

現在はっきりしているのは選手は「47年度ナショナル」から選ばれることだけでコーチングスタッフを含めての人数などそれまではいっさい〃白紙〃。

日本協会は貴重な強化期間とみて候補選手の激しい競争と精進を期待している。強化合宿は別掲のように2月以降7回（約60日）の予定だ。また一昨年好評だった「国内サーキット」の実施も考えられている。

なお、オリンピック対策部では4〜5月のあいだにヨーロッパ遠征を希望しているが、予算面での裏づけがカベとなっており、今後の日本協会首脳陣のでかたが注目される。

○……強化合宿日程……○

▽第1次　2月14〜20日（大阪）
▽第2次　3月中旬（東京・自衛隊体育学校＝予定）
▽第3次　4月上旬（未定）
▽第4次　5月12〜25日（未定）
▽第5次　6月中旬（東京）
▽第6次　7月20〜30日（東北地区）
▽第7次　8月3〜10日（東京）

「全日本中学」（仮称）今夏実施へ

日本協会は1月14日の月例常務理事会で各方面から熱望されていた「全日本中学校ハンドボール選手権大会（仮称）」を今夏8月愛知県下で開くことに内定した。

大会の詳細と正式決定は2月の全国会議（評議員会、理事会）で行われるが、早くても48年度からとみられていた同大会を新年度実施に踏み切ったのは、アジア予選後、田村（会長）―荒川（理事長）ラインが打ち出した「底辺対策」と、地方関係者の積極的な声によるもので、中学問題検討委員会も大会開催の方向を確認している。

第1回大会は夏休み中の2日間を利用、出場チームはブロックを単位に男女各10〜16チームの線に落ち着きそうだ。

2月19日大阪でワクナガと対戦

日本協会は毎日放送（大阪）の企画によるTVマッチ「オリンピック強化試合」を2月19日午後2時から大阪市中央体育館で行うと発表した。

同試合は〃土曜ワイドスポーツ2月第3週〃として制作されるもので別掲のオリンピック候補とワクナガ薬品（大阪・全日本2位）が対戦する。木野、早川両選手はワクナガ側から出場の予定。なお、この試合に先立って12時50分から大阪選抜軍とも試合する。

日本〝6年の空白〟ひびき9位

第4回世界女子選手権は12月11日から19日までオランダ各地の会場に9ヶ国が参加して開かれた．〝上位入賞〟を期待された日本はやはり6年にわたるブランクが影響，4戦1引き分3敗という成績で9位に甘んじた．優勝は東ドイツ．

優勝は東独　第4回世界女子選手権終わる

2戦とも後半にくずれる
惜しまれる渡辺の負傷欠場

予選リーグA組

第4回世界女子選手権は12月11日オランダで開幕、オープニングの日本×西ドイツ戦は千五百の観衆を集めたユトレヒト市のスポーツホールで行われた。審判＝スモレンゴ、カルセンバーグ（ソビエト）

西ドイツ 10（5−4、5−3）7 日本

	【西ドイツ】	得
GK	アイツヒナウアー	0
GK	メンツエル	0
FP	ジーベルト	0
FP	キンド	0
FP	ホエイ	1
FP	レイトウエスナー	6
FP	ワルツラウド	0
FP	ハーゲンバツハ	1
FP	ウエルツ	2
FP	クルス	0
	7MT	(1)
	計	10

得	【日本】	
0	北岡	GK
0	小原	GK
0	枝尾	FP
6	垂水	FP
0	米	FP
1	牧野	FP
0	古佐原	FP
0	島田	FP
0	滝口	FP
0	三宅	FP
0	三毛	FP
0	渡辺	FP
(4)	7MT	
7	計	

○……西ドイツがたえず先行していたが日本もよく粘り、後半開始直後5−5に追いつき5−6、6−6と前半以上のせりあいになった。

しかし西ドイツは後半11分から5分間にかけてレイトウェスナーを中心とした攻撃陣が一気にスパート、4点をもぎとり10−6と開き日本にとってこれが致命傷となった。日本もそのあと垂水のゲットで7−10とし、なお反撃の気勢を示したが、余裕のある西ドイツはムリな攻撃は仕掛けず守りを固めて逃げ切った。

○……日本は西ドイツ転戦中に左腕・渡辺が左ヒザの軟骨裂傷を負ったまま回復せず、もう一人のアタッカー牧野も西ドイツの徹底的なマークにあって思うような動きが見られなかった。

日本の速い動きを終始警戒して封じこんだ西ドイツの策戦勝ちである。

後半、引きはなされる

第2戦・日本×デンマークは12月12日ロッテルダム市営体育館に千八百の観衆を集めて行われた

審判＝パーソン、デュウルセン（ポーランド）

デンマーク 11（4−4、7−3）7 日本

▽反則退場【日】垂水【デ】ラガーボン、L・ニールセン＝各2分

	【デンマーク】	得
GK	アンネッテダール	0
GK	ハンセン	0
FP	M・クリステンセン	0
FP	ラガーボン	1
FP	A・ニールセン	1
FP	L・クリステンセン	0
FP	L・ニールセン	0
FP	ラスムッセン	8
FP	リース	1
FP	セレンセン	0
FP	ルートボールゲン	0
	7MT	(6)
	計	11

得	【日本】	
0	小原	GK
0	北岡	GK
0	枝尾	FP
0	三宅	FP
4	垂水	FP
0	米	FP
1	牧野	FP
1	島田	FP
0	寺尾	FP
0	滝口	FP
1	古佐原	FP
0	三毛	FP
(1)	7MT	
7	計	

○……日本は特色であるスピーディなゲーム展開を見せたが、国際ルールに対する不馴れからか7本の7MT（うち6ゴール）をとられたほか、身長差の不利はおぎなうべくもなく惜敗した。

先取点は3分ラスムッセンがあげ日本も7分の7MTを垂水が活かして追いついた。ところが日本は11、15、17分に7MTを課せられいずれもラスムッセンがポイント、4−1と引きはなされた。

○……日本はひるまず19分垂水、21分島田のゲットのあと、ハーフタイム直前垂水がゴール、同点とする粘りをみせた。

後半もデンマークが2分ラスムッセンで5−4とすれば、日本も3分垂水がすかさず返し5−5、垂水×ラスムッセンの射ちあいは観衆を熱狂させた。

しかし、このあと日本はまたしても連続して7MTによる失点で10分には9−5と差をつけられた

○……日本は7分牧野、20分古佐原がゲットしたが、疲れがのぞいて3点差までが精いっぱい、準決勝リーグへの資格を失った。

デンマーク、辛くも勝つ

第3戦、デンマーク×西ドイツは12月13日ユトレヒトで行われ前半デンマークが波にのった攻撃でリードを奪ったが、後半にはいると西ドイツが猛反撃、もつれた。

しかしデンマークは辛くも最少点差で勝ちA組1位を決めた。

デンマーク 12（7−3、5−8）11 西ドイツ

【A組後記】本場の動向を6年以上つかめなかった日本が、大会40日前に離日し、欧州5ケ国を転戦した意欲が不幸にも〝裏目〟になってしまった。

日本は各地で14戦のトライアルゲームを行い12勝をあげたが、その間に日本の示したクイックプレーを同じ組の西ドイツ、デンマークは充分〝研究〟したようだ。

キャリアの差がこの組の順位を決めた、といえるのではないか。

山田監督は「前哨戦が多かったとは思えない。むしろ多くの収獲があった」と話していたが、たしかにルーマニアとの善戦（11月13日）など関係者の注目を集めるに充分だった。東欧諸国の強さは予想どおりだがデンマーク、西ドイツ、ノルウェー、日本らの実力は伯仲している。

7位入賞も逃がす（11敗1分）

7〜9位決定リーグ

7位から9位までを決めるリーグ戦は日本（A組）、ノルウェー（B組）、オランダ（C組）の3ケ国によって12月15日からアルンヘルム市などで行われた。

第1日は12月15日ユトレヒト市のスポーツホールで日本ノルウェー戦を行った。審判＝ブルンバウエル、ハイゼル（オーストリア）

日本 12（6−7 / 6−5）12 ノルウェー
引き分け

得	【日本】		【ノルウェー】	得
0	小原	GK	ウィラッセン	0
0	北岡	GK	ウフアウスク	0
2	牧野	FP	フフラセットト	8
0	米	FP	ツベテール	0
5	垂水	FP	ストロールバーグ	1
5	島田	FP	スケイン	1
0	古佐原	FP	ハルボルセン	1
0	枝尾	FP	B・アンデルセン	1
0	滝口	FP	ブレンネ	0
0	三宅	FP	M・アンデルセン	0
0	三浦	FP	ガンク	0
0	三毛		アニスダール	0
12	（2）	7MT	（2）	12

▽反則退場【日】米、垂水（いずれも2分）、垂水（5分）【ノ】ハルボルセン（2分）

全日本女子選手団

				【世】	【公】	【親】
監督	山田　計	(49)	日本協会常務理事			
コーチ	宇津野年一	(48)	日本協会技術指導委員			
コーチ	井　薫	(34)	大洋デパート監督			
GK	小原　名苗	(23)	大洋デパート	0	0	0
	北岡　千賀	(23)	愛知教員ク	0	0	0
FP	枝尾　清女	(24)	大洋デパート	1	2	6
	三宅美智子	(24)	大洋デパート	0	0	1
	垂水　秀代	(23)	大洋デパート	21	10	32
	渡辺須和子	(23)	大洋デパート	1	24	42
	米　恵美子	(23)	大洋デパート	0	2	10
	滝口　治代	(22)	東京重機工業	0	0	5
	牧野　涼子	(22)	東京重機工業	4	7	38
	三毛　直子	(22)	田村紡	1	2	13
	寺尾由美子	(22)	大崎電気	0	0	7
	三浦　朝子	(21)	大崎電気	0	0	1
	島田　夏枝	(21)	大洋デパート	7	7	23
	古佐原ひろ子	(21)	東京重機工業	2	0	7
随行員	中川　葵		東急航空			

【世】は世界選手権4戦の得点　【公】は公式国際試合4戦の得点　【親】は国際親善試合10戦の得点

後記　コーチ　井　薫

予選リーグ二試合に比べると日本も、本来の速い動きをとり戻し接戦となった。ノルウェーのエース、カーレンは1m87cmの長身で、どの国も彼女をマンツーマンでつぶす程の選手で、勿論日本もゲーム開始より徹底的にマーク、然しこの戦法に馴れているせいか中央からのフリースローを多く狙われ、得意を許す、日本も垂水、牧野のロングジャンプシュート、更に島田の速攻及カットイン等で、迫力あるゲームを展開する。只GKからの速攻えのパスが、相手長身プレイヤーに何度かカットされるケースがあり、得点機を逸した事は惜まれるし、今後の外人相手の課題にも思える。12対12で迎えた後半、残り20秒で単独速攻のチャンスをつかみ、古佐原が県命にダッシュ、最後は突き飛ばされ乍らシュート、日本であれば当然7mのケースも、シュートをしてしまえば競技続行と判定する審判（選手権では、殆んどこの判定）でゲーム続行、そしてタイムアップ、世界選手権念願の一勝を目前に12対12で引き分けに終る。

ノルウエー、7位を確保

第2日ノルウェー×オランダ戦は12月17日アルンヘルム市体育館で行われた。

ノルウェー 8（5−3 / 3−4）7 オランダ

渡辺、気力の7MT

第3日日本×オランダ戦は12月18日アルンヘルム市体育館で行われた。審判＝パーソン、デュウルセン（ポーランド）

オランダ 13（6−9 / 7−2）11 日本

得	【日本】		【オランダ】	得
0	小原	GK	マーネン	0
0	北岡	GK	ブーレン	0
9	垂水	FP	カペル	2
0	米	FP	ヘンドリックス	4
1	三毛	FP	ランツアート	1
0	牧野	FP	メイイエル	0
1	古佐原	FP	ピルラー	3
1	島田	FP	ギールディンク	0
0	滝口	FP	ドラーネン	0
0	三宅	FP	アーツ	1
1	枝尾	FP	スミット	2
1	渡辺			
11	（3）	7MT	（5）	13

後記　コーチ　井　薫

この試合、2点差以上をつけて勝てば7位が確保できる。

選手権最後のゲーム、開催国オランダと対戦のせいか、凄い声援の中でゲーム開始。前半垂水のロングが良く決まり、更に20分に得た7mには膝の怪我で、選手権未出場の、渡辺を起用、彼女も期待に応えて得点、9対6で前半を終る。後半スタートより渡辺を出場させして幾くつかの、フォーメーションを試みるが、二十日ぶりのコンビのせいか動きに精彩を欠き、その間にじりじりと反撃を許し、特に長身プレイヤーをポストに配しての徹底した7mを狙ろ作戦に、遂に同点にされ、そしてリードされると云ろ、最悪のゲーム展開となる。この様な世界の舞台で然も地元相手には、3点のリード等、有って無い様なもの、勝負に対しての執念、根性で絶えず相手を制し、リードする事の大切さを痛感する。

日本の世界女子選手権成績

▼第2回大会（昭37・ルーマニア）

▽予選リーグB組

ハンガリー 17−8 日本

デーマーク 12−7 日本

▽7〜9位決定リーグ

ポーランド 16−10 日本

西ドイツ 15−6 日本

日本は9位

▼第3回大会（昭40・チェコ＝予選、西ドイツ＝本大会）

▽第1次（予選）ラウンド

チェコ 17−8 日本

チェコ 17−7 日本

▽予選リーグA組

西ドイツ 15−5 日本

デンマーク 10−9 日本

ユーゴ 9−5 日本

▽7・8位決定戦

日本 6−5 ポーランド

日本は8位

▼第4回大会（昭46・オランダ）

日本は9位＝記録別掲

▽世界選手権における日本の通算成績 14戦1勝12敗1分。

（注）日本は第1回大会には不参加

東ドイツ、ユーゴ破り優勝

ハンガリー3位　東欧勢上位を占める

予選リーグ

◇B組

ユーゴ 14（5−3、9−4）7 ノルウェー

ルーマニア 8（4−3、4−3）6 ノルウェー

ユーゴ 12（9−4、3−8）12 ルーマニア
引き分け

○……予想どおりユーゴ、ルーマニアがノルウェーを降して勝ちあがった。

ユーゴはクネゼビクを中心とした攻撃力がすばらしいデキで最終戦も楽勝かにみえたが、ルーマニアはバルコイアーヌとアーギィルのコンビがつづけさまに好シュートを決めてばん回、タイムアップ直前逃げ切りをはかるユーゴをつかまえ引き分けた。

両国とも準決勝リーグで東ドイツとの対戦をさけようという思惑がからみ、そのためにはこの組の〝1位〟が必要とあってすさまじいばかりのぶつかり合いを見せた。

ノルウェーではエース・フラセットの活躍が目立っていた。

東ドイツ、好調なスタート

◇C組

ハンガリー 12（6−1、6−2）3 オランダ

東ドイツ 15（8−3、7−5）8 オランダ

東ドイツ 9（4−6、5−2）8 ハンガリー

○……前回（一九六五）の女王ハンガリー、今回の優勝最有力候補東ドイツ、それに地元オランダの揃ったこの組はさすがに各試合とも満員のファンを集め熱狂した。

やはりオランダの実力は一歩おくれて2試合ともほとんど勝機らしいものはなかった。

東ドイツ×ハンガリーは壮烈な試合となり〝決勝〟といってもさしつかえないほどであった。

東ドイツはホクムス、ハンガリーはスタービンスキーと当代一流のポイントゲッターをようし、ともに当然の策戦としてディフェンスはこの二人のつぶし合いになった。

身長差に優るハンガリーは、前半積極的なロング戦法が当ったが、後半になると東ドイツにその単調さをつかれ、思うように点を加えられなかった。そればかりか東ドイツのじわじわ攻めつける力を支え切れなくなり終盤に逆転を許す結果となった。

準決勝リーグ　12月15〜17日

ルーマニア、デンマークの善戦及ばず

◇1組

ルーマニア 11（4−3、7−8）11 デンマーク
引き分け

○……エキサイトした好試合。特にデンマークは多彩な攻撃によって、試合を大いに盛りあげ、試合前の予想を裏切る健斗であった。

ルーマニアは鉄砲・バルコィアーヌがこの試合でもデンマークのL・ニールセンを中心とした執ようなマークをはずして着々とポイントをあげた。

しかしデンマークもベテラン、A・ニールセン（編集部注、この選手は12年前の第2回大会から出場している）の活躍とGKダールの健斗で11−8とリードを奪い〝番狂せか〟とコートサイドを沸かせた。ルーマニアは残り10分から驚くべき粘りをみせ、23分10−11とせまったあとバルコイアーヌが必死の同点シュートを決め、辛くも引き分けにもちこんだ。

東ドイツ 12（7−7、5−3）10 ルーマニア

○……2度目の優勝を狙うルーマニアにとって最大の難関、その斗志がたえず先行する試合運びに実ったが、後半になるとディフェンスの差があらわれ東ドイツが優勝へ大きく一歩前進した。

東ドイツ 12（4−3、8−4）7 デンマーク

○……勝負は後半にかかった。東ドイツが5−3とリードを奪った時は試合のペースを握るかにみえたがデンマークも反撃、5−5に追いついた。

しかしスタミナと強シューター揃いの東ドイツは、デンマークがわずかな疲れから動きが鈍くなるや着々ポイント8−5、9−6、12−7と開いて押し切った。

西ドイツの反専空し

◇2組

ユーゴ 11（6−3、5−5）8 西ドイツ

○……ユーゴはトルティが西ドイツディフェンスの外側から強烈なシュートを射ちこんであっさり3−0。西ドイツは奮起していったんは3−3とタイにしたのだが、その後再びユーゴの攻撃をうけて3点差を脊負された。後半西ドイツは巧く試合を運んで6−7まで追いこんだが、結局は前半の失点がひびいて敗れた。

ハンガリー 12（7−4、5−6）10 西ドイツ

○……前半のリードをいかしたハンガリーが後半も余裕のある試合ぶりで制勝した。西ドイツは前日同よう、相手にたえず先行を許したのが敗因。

ユーゴ 12（6−4、6−2）6 ハンガリー

○……この試合に勝てばハンガリーは2連覇の夢をつなげる。

その気負いがかえってラフな試合運びになってしまい、要所で7MTをとられ、ユーゴはそのたびにクネゼビクが確実に決めて優位にたった。ハンガリーも前半はどうにか互角にもちこんだが、ユーゴは後半トルティらの活躍でハンガリーの野望をたち切った。

順位決定戦

西ドイツが5位に

◇5〜6位決定戦（12月18日・アルンヘルム）

西ドイツ 13（3−5、6−4、2−0、2−0）9 デンマーク

○……予選リーグでの対戦は大接戦の末12−11でデンマーク。この試合もまるでその時のつづきのようにもつれたが、最後はスタミナの優劣が順位を決めた

歴代優勝国

①一九五七年　チェコ
②一九六二　ルーマニア
③一九六五　ハンガリー
④一九七一　東ドイツ
(注)一九六八年に予定されたモスクワ大会は流会。

せりあいでハンガリー

◇3～4位決定戦（12月19日・アルンヘルム、観衆二千八百）

ハンガリー 12（5―6、4―3…1―1、0―0…1―1、1―0）11 ルーマニア

審判パーソン、デュウルセン（ポーランド）

得	【ハンガルー】		【ルーマニア】	得
0	ギュラーネ	GK	クルモブシ	0
4	トス	FP	スース	4
5	スジク		アルギール	0
0	スゾケ		フルコィ	1
1	タカクス		ポパ	0
0	ステルビンスキー		パイコアーヌ	2
0	スザホー		ミクロス	3
1	トマン		イバドゥラ	0
1	不明		オアンセア	0
			不明	1
12	（1）	7MT	（3）	11

観戦記

コーチ 宇津野年一

前回優勝のハンガリーとルーマニアの3位決定戦は、共に巨漢選手を持ち、左ききのロングシューターを持ち、5・1の防御フォーメーションをとるなど、同型のチームの対戦とあって、攻防でどんな激突が見られるか、興味津々たるものがあった。ゲームはハンガリーが先行したが、その後は一進一退のゲーム展開が続き、前半はルーマニアが6対5とリードした。

後半7対5からハンガリーのトースが7mを落し、8対5とリードしたルーマニアの勝利が濃厚であると思われたが、中盤以後に見せたハンガリーの急追は8対8から、スジクのゲットで逆転しそのまま逃げ切るかに見えた。しかし、時間切れ寸前ルーマニアフルコイの強引とも思えたポストからの突込みが7mを誘い自らこれを決めて延長とした。ゲームは2回の延長を行なった結果、ハンガリーが3位を得たが、ゲーム後抱きあって、コートに倒れこんだハンガリーチームの感激は終生忘れることがないであろう。またルーマニアのスースの執念に燃えたプレーも印象深いものであった。

決勝戦

ユーゴ、善戦実らず惜敗

6年ぶりに決まる世界女子ナンバー・ワンの座、決勝戦東ドイツ×ユーゴは12月19日アルンヘルム市体育館に三千二百の観衆を集め3位決定戦（前掲）につづき行われた。審判・カールソン、オルソン（スウェーデン）

東ドイツ 11（5―4、6―4）8 ユーゴ

得	【東ドイツ】		【ユーゴ】	得
0	ツーバー	GK	イストバノビック	0
0	コッホ	FP	パレザノビック	3
0	ハインツ		ラダュビック	0
0	カーント		カドビック	0
1	ブラウン		セロ	0
0	ヘルビッヒ		トルチ	3
3	ヴィンクラー		アンチオ	0
3	ホックムース		ジョルジェビック	0
4	クレッツシュマー		クネゼビック	1
			パラベルサ	0
			トマセック	1
12	（0）	7MT	（2）	8

観戦記

コーチ 宇津野年一

第2延長の大熱戦を展開した3位決定戦の興奮が未だ醒め止まない中で、優勝戦が行なわれたのは午後五時頃であった。ゲームに先立って行なわれた国歌吹奏だけというろ簡単なセレモニーで、国歌を静かに唱和する両チーム選手の動じない堂々たるマナーを見て、これこそ豊富な体験から滲みでる自信であると感じた。同時に戦う前の静けさともいうべき緊張感を覚えたのである。満身これ闘志といった感じの東ドイツの面々、とやや精気なく見えたユーゴの面々、戦いは既に始っているというのに全く好対照の場面であると思った。先にユーゴとハンガリーとの一戦を観戦し、その時の素晴らしかったユーゴの戦い振りが、脳裡から離れなかったことから、勝利の分がユーゴにあるとすら考えていた私には、物静かな、否不元気とさえ感じられたユーゴ選手の表情が何か不安に思えたのである。ゲームはユーゴ⑬のミドルシュートによる先取点で展開された。東ドイツは右サイドに位置する左きき⑧を起点とするローリングオフェンスから、彼女自身が左サイドからゲットし1対1と追いつき、続いて右ききの強シューター⑪と⑧、ポイントゲッター右きき⑬の3人が、ゴール前で⑧→⑪→⑬、⑪→⑧→⑬と、クロスからのジャンプシュートモーションパスを駆使した豪快なフォメーションで、最後は⑬が素晴らしいジャンプシュートを決め2対1とリードを奪った。このあたり決戦にふさわしい力と力の対決であった。本大会では12～13点が勝者の限度であり、得点内容の重要なポイントが7mの得点であることは、日本のゲームでは数少ない異った傾向であると感じていたが、この7mの成否の明暗が、5対4で東ドイツのリードで前半を終った後半直後に起ったのである。後半開始後ユーゴが挽回しなければならなかったゲーム展開が、逆に東ドイツ⑩が放ったバックス前からの絶妙な変形シュームが決って6対4と引離し、さらに⑬のロングシュートで7対4となったところで、7mを得たユーゴが、エース⑥に託した起死回生の一投が、惜しくもラインクロスの判定で挽回のチャンスを逸したことである。その上その後の東ドイツは、⑪の豪快なジャンプシュートが決って8対4とリードするというこの明暗が、優勝を決定づけたといっても過言ではないと感じた。

ユーゴがその後②のミドル、⑩の7m、⑥のミドルが決って8対7と追いあげたことから考えても、全く悔やまれる7mのラインクロスであり、不用意の一投であったといえよう。8対4とリードし殆んど勝利を掌中にした東ドイツは、ユーゴの懸命の追い込みにも全く動ずることなく、終始チーム全体が冷静で、全身に漲る闘志は、本当に立派なゲームマナーであり、その後も⑬、⑪、⑪とロングの決定打を放ち、ユーゴ⑥の獅子奮迅の活躍も1点で押え、ユーゴの野望を絶ち切り、栄えの勝者となったのである。最後にこのゲームの教訓は、粘りと根性に尽ると思う。

次回はモスクワが有力

一九七四年（昭49）に予定される第5回世界女子選手権の開催地はモスクワ（ソビエト）が有力と伝えられる。

フランス、西ドイツ転戦は全勝

親善試合成績続報

親善試合の成績（第8戦以降）

アングレームに大勝

遠征第8戦はフランスにおける第2戦として11月19日アングレームで地元の選抜チームと行った。

日本 30（14－0 / 16－3）3 アングレーム選抜

位置	【日本】	得
GK	小原	0
GK	北岡	0
FP	米	1
FP	渡辺	8
FP	牧野	8
FP	寺尾	3
FP	三毛	4
FP	島田	5
FP	枝尾	0
FP	三宅	0
FP	三浦	1
FP	古佐原	0
	（2）	30

（注）相手のメンバーは不明

後半一気に逆転遂ぐ

遠征第9戦は11月21日パリのサンモール体育館に約千四百の観衆を集め、フランスナショナルとの第1戦として行われた。

会場は日本でもおなじみのステラ・スポーツのホームコート。

フランスは前半こそノエルの好リードとクロスの巧技でリードを奪ったが、個人技、チームプレーとも日本が秀れ、しだいにフランスのディフェンスは日本のスピードに崩される場面が目立ちはじめた。後半は日本が完全に試合のペースを握って逆転、終盤は押しまくった。（この項フランススポーツ紙〝レ・キプ〟から）

日本 15（8－4 / 7－9）13 フランス

得	【日本】	位置	【フランス】	得
0	小原	GK	スクレペル	0
0	北岡	GK	ゲイラール	0
1	枝尾	FP	ベシア	0
2	垂水	FP	クロス	5
1	米	FP	デュリン	1
10	渡辺	FP	クラーク	0
1	牧野	FP	ウルバン	0
0	島田	FP	ビゴー	1
0	三宅	FP	レフェルブル	0
0	三浦	FP	モリアール	2
0	三毛	FP	ノエル	2
0	古佐原	FP	ギャラン	2
15	（2）	7MT	（1）	13

仏ナショナルに連勝

遠征第10戦はフランスナショナルとの第2戦として11月23日パリのリブリィ・ガルガンホールに約八百の観衆を集めて行った。

17分まで3－3のせりあいだったが日本はそのあと渡辺、島田らの巧いプレーで加点、しだいにフランスを引きはなした。

フランスは第1戦の時よりもディフェンスが悪く、日本の素早い攻撃を食いとめるケースが少かった（この項〝レ・キプ〟紙から）

日本 13（6－4 / 7－3）7 フランス

得	【日本】	位置	【フランス】	得
0	小原	GK	スクレペル	0
		GK	ゲイラール	0
2	垂水	FP	レキントレル	0
6	渡辺	FP	マル、クエーネ	0
2	牧野	FP	デュリン	1
0	三毛	FP	ベシア	0
0	古佐原	FP	クロス	5
3	島田	FP	ノエル	1
0	枝尾	FP	ビゴー	0
0	米	FP	ギャラン	0
0	三浦	FP	プールボエール	0
		FP	モリアール	0
13	（1）	7MT	（3）	7

西ドイツ第1戦も飾る

遠征第11戦は西ドイツにおける第1戦として11月25日ハンブルグのアルスタードルフ・ホールで地元の選抜チームと行った。

日本 9（6－4 / 3－3）7 ハンブルグ選抜

得	【日本】	位置	【ハンブルグ】	得
0	北岡	GK	※アイッヒナウアー	0
0	小原	GK	ワグナー	0
1	米	FP	※ジーベルト	1
1	牧野	FP	※ミルター	1
0	寺尾	FP	ペイン	2
0	三毛	FP	シュリョーダー	1
1	古佐原	FP	シュルッツ	0
0	島田	FP	ボッシエル	0
4	渡辺	FP	ネントウィッヒ	0
1	枝尾	FP	※クリュス	2
1	垂水	FP	ツン	0
0	滝口	FP	メイバーグ	0
9	（0）	7MT	（0）	7

※印はナショナルプレイヤー（以下同じ）

ハンブルグは西ドイツ女子界の主流。洗れんされた試合運びをみせ、日本は苦戦を強いられた。

日本チームはパリから10時間の列車による移動のあとなので、いささか疲れが見え、ハンブルグにリードを許したが、すぐに渡辺のダイナミックなシュートで3－3のタイにして前半を終了する。

後半、とりつとられつをし、7－7の同点から良く2点をとり、9－7で辛勝。この試合、ドイツのナショナルGK、アイヒナウアの堅陣を良く破った渡辺のシュート力が特に眼についた（ハンブルグの地元新聞記事より）。

ミルターが勇退　西ドイツナショナルのエースとして多彩な攻撃を誇ったクリスタ・ミルター（ハンブルグ・ユニオンSC）がこの試合を最後に第一線から退いた。昭和43年9月来日〝銀髪の強打者〟として日本のファンにも印象ぶかいプレイヤーであった。

渡辺、痛恨の激突、負傷

遠征第12戦は11月26日デュセルドルフで…

日本 18（11－5 / 7－8）13 ニーダーライン選抜

得	【日本】	位置	【ニーダーライン】	得
0	小原	GK	S・レナート	0
		GK	エリカ	0
1	滝口	FP	D・レナート	0
6	垂水	FP	オウデニッヒ	0
0	米	FP	イングリット	1
4	牧野	FP	※ワルツラウド	5
1	三毛	FP	エリカ	0
0	古佐原	FP	リア	2
1	島田	FP	※マルリー	2
1	枝尾	FP	エディス	1
4	渡辺	FP	カリン	1
0	三浦	FP	レイニ	1
18	（7）	7MT	（1）	13

ドルフのフィリップス・ジムに約七百の観象を集めニーダーライン選抜軍と行った。

ラフなゲームであった。両チームあわせて11本の7MTが課せられともに内容的には物足りなかった。日本は後半相手の疲れに乗じて一気に逆転勝ちしたが渡辺がワルッラウドのトリッピングとプッシングに会い左膝を打撲するアクシデントがあった。

後半、豪快に逆転

遠征第13戦は11月28日ミンデンのクレイス・スポーツホールに約千三百の観衆を集めアイントラハト選抜軍と行った。

日本 16（10―0, 6―7）7 アイントラハト選抜

得	【日本】		【アイントラハト】	得
0	北岡	GK	ニエポッター	0
0	小原	GK	クレインフィンケ	0
1	枝尾	FP	パペンリック	1
4	垂水	FP	エスターマン	0
2	牧野	FP	マルジス	0
1	三毛	FP	※I・キント	1
2	古佐原	FP	O・リョッケマン	0
0	島田	FP	プライス	0
1	滝口	FP	※V・キント	2
0	三宅	FP	E・リョッケマン	1
4	米	FP	コスロウスキー	2
1	寺尾	FP		
16	(3)	7MT	(1)	7

アイントラハトはキント姉妹を中心としたセットプレーでポイントをあげた。日本も積極的に射ってでたが前半はどうしても追いつけず接戦。力の差がはっきりでたのは後半。スピードのあるゆさぶりで5点を連取、終盤は互いに主力を休ませたため、日本はさらに楽に試合を進めた。

最終戦も圧倒的な勝ち

遠征第14戦（前哨戦最終試合）は11月29日西ベルリンのショネバーグ体育館に約八百の観衆を集めて西ベルリン選抜と行った。

日本 18（10―8, 8―2）10 西ベルリン選抜

得	【日本】		【西ベルリン】	得
0	北岡	GK	ハゲン	0
0	小原	GK	ショット	0
2	滝口	FP	ドッヘルケ	0
4	垂水	FP	デュスチャン	0
3	牧野	FP	バエックマン	3
2	三毛	FP	ガーリング	2
2	古佐原	FP	セグレッキー	1
2	島田	FP	デッシン	4
1	三宅	FP	シューマン	0
2	米	FP	シュルツ	0
0	三浦	FP	ステンペル	0
0	寺尾	FP	パウリ	0
18	(1)	7MT	(0)	10

トライアルゲームの最終戦、張り切った日本攻撃陣はスタートからスピードにあふれた攻守で西ベルリンを圧倒、快勝した。

これで前哨戦の通算成績は14戦12勝2敗。「ルーマニアにおける2試合はボールテクニック、速さ力強さで一歩をゆずったが他の4ケ国では日本の速い動きが上」（山田監督）

「日本のおくれている点は防禦法（隊型ではなく動き）であり、基本を忠実に行う根気のよさ、粘りが必要」（宇津野コーチ）

「懸念された体格のハンディ、ボールを握るテクニックも馴れるにしたがい気にならなくなった。日本の早い動きは大きな〝武器〟であり、西ドイツの4戦はフォーメーションを一つも使わず乗り切った」（井コーチ）

渡辺の負傷以外すべてに順調、自信をもってのオランダ乗りこみであったのだが……。

◇遠征第1戦詳報（11月3日・グロニンゲン＝デンマーク）

日本 14（8―6, 6―6）12 デンマーク

得	【日本】		【デンマーク】	得
0	北岡	GK	ハンセン	0
0	小原	GK	ダール	0
0	寺尾	FP	M・クリステンセン	0
2	三毛	FP	パツーウェル	1
2	島田	FP	ラスムッセン	4
0	米	FP	ツィゲッセン	1
3	牧野	FP	イエンセン	0
4	垂水	FP	ラガーボン	1
3	渡辺	FP	A・M・ニールセン	0
0	古佐原	FP	L・クリステンセン	2
0	枝尾	FP	L・ニールセン	1
0	三宅	FP	オルセン	2
14	(1)	7MT	(4)	12

イタリアで紅白試合

世界選手権後日本チームはイタリア協会の招きで12月24日ローマに立ち寄り、同国の指導者、女子選手を前に紅白試合を披露した。

日本、ユーゴ、イタリアの国際大会が中止となり代りに企画されたもの。

ヨーロッパの審判判定

親善試合14戦を通して感じたヨーロッパの判定傾向は次のようなものである。

一、エリア内防禦は即時7MT。

一、シューターに対するプッシング、ホールディングは文句なく7MT。シューターが振り切ってシュートした場合はとらない。（ポストプレイヤーがチャージ気味に押しこんで来る外国選手のプレーに日本はかなり7MTをとられた。）

一、シュート時の日本選手のステップはジャンプステップともオーバーステップにとられるケースが多い。フェイント時も同じ。

一、防禦での押し、突きは厳しく注意する（日本ではよく手を出す）【宇津野】

12月27日に帰国 全日本女子・山田監督ら18人は12月27日午後10時15分着のフランス航空機で帰国した。山田監督以外ヨーロッパ遠征は全員初めてだったが元気な姿で田村会長、福本大崎電気監督ら日本協会、チーム関係者の出迎えをうけた。なお同チームは空港ロビーで〝解団〟した。

本誌では次号にも「世界女子選手権回顧」を特集する予定です。

世界女子選手権より帰りて

～6年ぶりの欧州遠征・課題と反省～

山田計（全日本女子監督）

西ドイツにいる時に、日本がアジア予選で勝ったことをきき、男子がガンバリつかんだチャンスに女子も世界選手権で続こうと、選手団一同はりきったのだが、どうも期待に答えられず残念であった

最初に、まず現在の日本の女子の違っしている技術・戦術などの水準はヨーロッパ諸国に決っして劣っているものではない。このような意味での、6年間の空白というものは全く感じられなかった。

今回の敗因は種々のものが考えられるが、決っして技術的・戦術的なものではなく、また各方面からいわれているような長期にわたるヨーロッパ転戦の疲れが本大会で出たということでもない。

強いていうならば、私を除き、他のコーチ、選手がヨーロッパがはじめてであり、それからくる種々の精神的・肉体的なキャリア不足というものが大きく影響したことは否めない事実である。この点では、やはり6年間のブランクはあったといわねばなるまい。

国際経験のない全日本女子チームを少しでも体験をつませ、そのキャリア不足を補うべく、11月の初めに出発し、各地を転戦するという長期の準備期間をもったことはむしろプラスの面が多く、心配された本大会での疲労は全くなかった。前哨戦は14戦12勝をあげ、コーチ・選手とも本大会でやれるという確信をもっていたのが、思わぬアクシデントのため崩れてしまった。

それは、11月26日のデュッセルドルフの親善試合での渡辺の負傷である。遠征中、当りに当り、フォーメーションプレーの中心に考え、ルーマニアとの試合でも高い評価を受けていた渡辺が負傷したあとになって考えると選手達にも深刻な影響があったように思える。〃事件〃は試合中、相手のキャッチミスのボールにスタートした渡辺を後からつきとばし更に足にのるというラフな反則からおきたことで、ただちに病院に入れたが歩行を禁止される状態、一時は快方に向ったが、オランダ入りしてからぶりかえし、ついにあきらめざるを得なかった。

このような状態で臨んだ世界選手権大会では、従来、垂水、牧野、渡辺の三本柱の一本が欠け、残る二人が徹底的にマークされた。このため、攻撃のリズムが全く狂い、不本意な試合のまま、力を出しきれないで大会をおわってしまった。

大会での各国の技術・戦術面はコーチングスタッフでしばしば話しあったが、優勝した東ドイツはスケールの大きな攻撃力をもち、さすがと思わせるものがあった。

2位以下の各チームに対しては十分に対抗できる確信を強めて帰ってきた。

特に2位になったユーゴーとは大会期間中同宿であった関係もあり、五度の練習マッチを行ない、互格の戦績を残している。もちろん本大会と練習ゲームは違うではあろうが、戦術・技術面では決っして劣っているとは思えない。

また、他の上位チーム、ハンガリ、デンマーク、ルーマニア、西ドイツにも十分対抗できる。特にルーマニアには、公式戦では敗れはしたが、練習マッチでは、13－13と引き分けているし、十分に対抗できる。

審判の問題もやや面喰うこともあったが、これは判定基準が女子は女子用の笛を吹くという底流がヨーロッパにはあるようで、これは決っして、成文化されたり、審判講習会で公式に出てくるものではないのであるが、女子の場合には、粗暴な行為はあってはならないということで、必要以上に7MTをとっている。特に日本チームは体重が軽いため、エリアに押しこまれる形で両足防禦をとられるケースもままあった。女子用のジャッジングの問題は日本でも検討する必要が出てこよう。

大会には、かなりの観衆も集り女子の六年ぶりの世界選手権ということで、関心も高く、将来オリンピック採用の可能性もあるということで、更に拍車がかけられ、熱気溢れたすばらしい大会であった。

（談・文責編集部）

予選リーグ

（A組）	デ	ド	日	P	得	失
①デンマーク	…	○	○	4	23	18
②西ドイツ	●	…	○	2	21	19
③日本	●	●	…	0	14	21

（B組）	ユ	ル	ノ	P	得	失
①ユーゴ	…	△	○	3	26	19
②ルーマニア	△	…	○	3	20	18
③ノルウェー	●	●	…	0	13	22

（C組）	ド	ハ	オ	P	得	失
①東ドイツ	…	○	○	4	24	16
②ハンガリー	●	…	○	2	20	12
③オランダ	●	●	…	0	11	27

準決勝リーグ

（Ⅰ組）	ド	ル	デ	P	得	失
①東ドイツ	…	○	○	4	24	14
②ルーマニア	●	…	△	1	21	23
③デンマーク	●	△	…	1	18	23

（Ⅱ組）	ユ	ハ	ド	P	得	失
①ユーゴ	…	○	○	4	23	14
②ハンガリー	●	…	○	2	18	22
③西ドイツ	●	●	…	0	18	23

7～9位決定リーグ

	ノ	オ	日	P	得	失
⑦ノルウェー	…	○	△	3	20	19
⑧オランダ	●	…	○	2	20	19
⑨日本	△	●	…	1	23	25

Pはポイント（勝ち点）

全日本女子遠征総成績

11.3	○	日本	14—12	デンマーク
11.5	○	日本	19—10	フンデルGF
				～以上デンマーク～
11.7	○	日本	15—11	ボーレンゲ
11.8	○	日本	20—11	ストックホルム
				～以上スウェーデン～
11.10	●	日本	14—18	ブカレスト大学
11.13	●	日本	12—18	ルーマニア
				～以上ルーマニア～
11.17	○	日本	26—8	アクイタイヌ
11.19	○	日本	30—3	アングレーム
11.21	○	日本	15—13	フランス
11.23	○	日本	13—7	フランス
				～以上フランス～
11.25	○	日本	9—7	ハンブルグ
11.26	○	日本	18—13	ニーダーライン
11.28	○	日本	16—7	アイントラハト
11.29	○	日本	18—10	西ベルリン
				～以上西ドイツ～
12.11	●	日本	7—10	西ドイツ
12.12	●	日本	7—11	デンマーク
12.15	△	日本	12—12	ノルウェー
12.17	●	日本	11—13	オランダ
				～以上世界選手権～

18戦12勝5敗1引分

GW・ダンケルセン（西ドイツ）が来日

4月上旬　全日本と2～3試合を予定

日本協会はオリンピック強化対策の一環として、かねてから来日を希望していた昨シーズンの西ドイツチャンピオン「グルン・ワイス(GW)・ダンケルセン」クラブを4月上旬招き、新編成のオリンピック候補チームと2～3試合行うことを内定、日程など具体的な折しようをはじめた。

同クラブは、3月末から極東旅行の途次日本に立ち寄るものだが昨春来日したVfL・グンメルスバッハが世界的アタッカーのシュミットのワンマンチームといった感じに比べてGW・ダンケルセンはムンクを中心に洗れんされたチームプレーが身上、日本チームへ与える影響も大きなものがあろう

西ドイツタイトルを獲得したのは昨季が初めてだが、西ドイツリーグではつねに優勝候補にあげられており、11人制のヨーロッパカップで優勝したこともある。

なお、今シーズンのヨーロッパカップでは2回戦で強豪マイ・モスクワ（ソビエト）に12－11、13－11で連敗、ベストエイト進出を阻まれている。

西ドイツリーグ（ブンデス・リガ）に登録されている同クラブのメンバーは次のとおりである。

▽コーチ　F・スパンヌース▽選手　バーラック、ブールメスターブック、ドロッグメイヤー、ジェスキング、ホルストキョーター、カーシェル、クラマー、クロケルルッチ、メイヤー、ムンク、プーク、レーゼ、ショーラー、スルクヴェング

スタデイオンも来日希望

今シーズンデンマークリーグのトップを走る名門スタディオン・IFクラブは5月中旬来日し5～6試合を行いたいという希望を寄せてきた。日本協会では受けいれについて近く協議する。またユーゴ女子ナショナル、ハンブルグ女子選抜西ドイツも日本遠征の意向を明きらかにしている。

キールは断念　日本協会は昨年12月月例常務理事会で2月に来日を希望していたTHW・キールクラブ（西ドイツ、男）はことわることになり、7月来日を打診してきたパリ大学男女（フランス）については全日本学連の意向によって態度を決める。

1月25日からアメリカ地域予選

ミュンヘンオリンピック大陸予選の二番手として、アメリカ地域予選が1月25日から30日までワシントンで開かれる。

参加国はアメリカ、カナダ、メキシコ、アルゼンチンの4ケ国、リーグ戦で一つの代表権を争う。

昨年の世界選手権（パリ）予選ではカナダがアメリカを破りながら経済的な理由で辞退、アメリカの出場となっている。

今回も両国の優位は動かないようで一九七六年のモントリオールオリンピックを控えたカナダ、意欲的な強化活動をつづけているアメリカの対戦は興味深い。メキシコ、アルゼンチンはこれまでほとんど国際的な実績がない。参加が予想されたブラジルは欠場。なおヨーロッパ予選は3月15日からスペインで、アフリカ予選は3月25日からチュニジアで開かれる予定。

日本審判員の起用は望みうす…オリンピック

日本協会ではかねてから日本人審判員のオリンピック、世界選手権など国際舞台における登用を国際ハンドボール連盟に対し要望していたが、アジア予選のため来日したホルル技術委員長は日本協会・荒川理事長との会談席上「IHFとしても各大陸と多くの国から優秀なレフェリーを集めたいと考えており日本も例外ではない。ただ我々は日本の審判員の〝実力〟を知らないし、ミュンヘン・オリンピックのレフェリーは各大陸予選を担当したペアを主体に選ぶことが望ましいと考えている」と述べた。

オリンピックのレフェリーは未決定なようだが、4大陸予選のためのレフェリーはすでに16ペアが発表されており日本の割りこみは難しい感じである。この16ペアのなかにはイスラエルのE・ブランドヴァイン、A・ジンガー組も含まれている。

なお、ホルル氏の意向で、11月25日国際審判員資格をもつ7氏が駒沢屋内球技場でモデルゲームのレフェリーをつとめてみせた。

〝大陸別理事〟をIHFに提案

国際ハンドボール連盟（IHF）関係担当の日本協会・渡辺副会長は1月14日の月例常務理事会で「IHFに対し大陸別の理事を役員構成の中にもりこむよう提案するつもりだ」と述べた。

IHF理事（定員7名）の選出は2年に1度開かれる総会席上各国の互選で行われているがヨーロッパ偏向の色が濃く現理事もモハメッド・ファダリ氏（アラブ連合）以外はいずれもヨーロッパ諸国の出身。

渡辺副会長は「大陸別の代表はアジア、アメリカ大陸への普及のためにも必要であり、今夏の総会で決議にまで持ちてみたい」としている。

オリンピック基金増額か

田村日本協会々長は47年度予算編成にあたって従来の一括収支を一般会計・機関誌会計・オリンピック対策会計・特別会計の4部に分ける意向を明きらかにした。

また35年度に実施以来一律百円（チーム単位）の「オリンピック基金」の増額（詳細未定）を全国会議（理事会、評議員会）に企る予定。

五輪派遣費の政府原案

日本体協に対する昭和47年度の国庫補助金の政府原案が1月12日決まった。それによると決定額は二億四千九百六十九万七千円（前年比約四千九百万円増）。注目のミュンヘンオリンピック派遣費は約二百八十人分に相当する七千万円が認められた。

指導者養成など底辺活動を協議

～普及部全国委員会開く～

日本協会普及部会は12月4日東京で渡辺（慶）部長（常務理事）をはじめ12委員（大西、小野、宮本、八重樫、加藤、中根、狩野、高木、荒木、三浦、斉藤、泉）が出席して開かれた。

オリンピック出場権獲得後、斯界の最重点課題は普及部による底辺対策にあるとあって活発な議論がつづいた。特に指導者の養成テキストブックの作成などについて早急に具体化を望む声は圧倒的で「中学校体育指導要領」に再採用されながら指導の手引きとなるデータやサンプルが整えられていないことなども指摘された。

これらの点についてはすでに草稿のできあがっている「テキストブック」、試作品が完成した「スライド」などを早い機会に一般に流布し、指導者講習会も日本協会を通じて行政機関とタイアップ、企画することに決めた。

このほか国体の種別出場チーム数および地域別割りあて数の再検討、ミニ・ハンドボール（幼少年向きハンドボール）の研究、教育系大学大会の開催、資料部門・研究部門の設置などの提案が行われ日本協会の意向を質すことになった。

〃中学問題検討委〃が発足

日本協会では中学校対策を検討するための特別委員会を編成、このほど委員長に荒川理事長を決めたほか、4名の常任委員を発表した。問題の進展にともない他の委員や中体連関係者を加えていく意向である。同委の第1回会合は12月18日東京で開かれ注目の「全日本中学校選手権（仮称）」の開催を宿泊費（全額）日本協会負担の線で打ち出した（3頁参照）

▽委員長　荒川清美▽常任委員　渡辺慶寿、入江暢一、嶋田新太郎　栗脇巌（以上日本協会常務理事）

北海道（室蘭）で女子実業団
インター・ハイは東根市

日本協会は12・1月の月例常務理事会で47年度の全国大会日程について協議、内定した。NHK杯の大阪開催と全日本中学（仮称）の新設が注目されよう。

昭和47年度全国大会日程　案

▽第4回全日本自衛隊選手権　5月19～21日（東京駒沢）
▽昭和47年度全国実業団トーナメント　6月18～21日（岐阜＝予定）
▽第19回NHK杯全日本選抜大会　6月23～25日（大阪市中央体育館）
▽第14回全日本実業団選手権（女子）7月18～22日（室蘭市）
▽第23回全日本高校選手権　8月1～7日（山形県東根市）
▽第1回全日本中学校選手権＝仮称　8月（愛知県下）
▽第15回全日本教職員選手権　8月16～19日（千葉県佐原市）
▽第21回（女子第4回）全日本学生選抜東西対抗戦　9月15日（名古屋＝予定）
▽第14回全日本実業団選手権（男子）9月27～10月1日（名古屋＝予定）
▽第27回国民体育大会ハンドボール競技　10月22～27日（鹿児島県隼人町）
▽第15回（女子第8回）全日本学生選手権　11月（大阪）
▽第24回全日本総合選手権　12月5～10日（東京）

男子学生、社会人が来日か
新年度の日韓親善試合

日本協会は12月の月例常務理事会で47年度の日韓交流について加盟団体の希望を聞き原則的に承認した。学生女子については未定。

○…47年度日韓交流案…○

▽第2回女子実業団交流　5月中～下旬　日本側遠征
▽第6回日韓学生交流　6月または7月　韓国側来日
▽第7回日韓高校交流（第5回日韓高校交歓競技会）＝日本体協に問合せ中。
▽第2回日韓男子社会人交流　韓国側来日。

〃〃〃〃〃〃〃〃

全日本男子を推せん
～日本スポーツ賞候補～

読売新聞社制定の日本スポーツ新聞社制定の日本スポーツ賞部門賞として日本協会はオリンピックアジア予選に快勝の全日本男子チーム（村田弘監督ら18人）を推せんした。

村山岡山協会長が受賞

村山寛・岡山県協会長（日本協会評議員、64才）は昨秋、スポーツ界への功績で藍綬褒賞を授与された。

2月11日に全国理事会

日本協会は定例の全国評議員会を2月12日午後1時から全国理事会を2月11日午後1時からいずれも東京・岸記会体育会館で開くことを決めた。

大崎電気、激斗のすえ優勝（6度目）

～全日本総合選手権・東京～

女子は日本ビクターに初の栄冠

今年度のナショナルチャンピオンチームを決める第23回全日本総合選手権は12月14日の開会式につづき15日から19日までの5日間東京千駄ケ谷の東京体育館（第1日のみ駒沢屋内球技場併用）に全国のトップクラス男子16、女子12チームが参加して開かれた。

男子はオリンピック出場権獲得直後とあってかってない盛りあがりをみせ、久々に所属チームに戻ったナショナルプレイヤーの個人技も冴えて充実した試合がつづいた。4強による決勝リーグは予想どおり激しい星のつぶしあいとなったが、結局大崎電気（日本協会推せん・埼玉）が2年連続6度目の優勝を飾った。

女子は、主力を世界選手権に送りこんでいたため迫力に欠けたが、若手の有望選手が期待どおりの活躍を示し初優勝を狙う日本ビクター（全日本実連推せん・茨城）―ブラザー工業（同・愛知）の争いから日本ビクターが宿願の全日本タイトルを手にした。

なおこの大会が東京で開かれたのは第4回（駒沢）以来19年ぶり3度目。7人制～室内～では初、また予選トーナメント・決勝リーグ制の採用は男子では初めて。

ベスト4に実業団3チーム

男子予選トーナメント

▽A組1回戦

ワクナガ薬品（協推・大阪） 17（8―5 / 9―8）13 大阪イーグルス（教推・大阪）

中大（学推・東京） 39（18―8 / 21―3）11 自衛隊勝田（自推・茨城）

▽同2回戦

ワクナガ薬品 14（8―6 / 6―5）11 中大

○……へき頭を飾るワクナガ×イーグルスはたがいに手の内を知りあった同士。イーグルスがベテラン揃いらしい巧みなかけ引きでワクナガを苦しめた。

ワクナガは3―3から前半13分14分（7MT）早川の連続ゴールでリード、さらに17分戸田がおしこんで優位に立った。イーグルスにとって3点差はそう重荷にならぬハズだったが、後半開始早々2点を失い5―10とされたのが響いた。中大×自衛隊は前半なかばから中大のペースとなり一方的。

○……ワクナガ×中大はワクナガが市原の活躍などで出足よく滑り出したが、中大も若さにあふれた直線攻撃で応しゆう好試合となった。特に後半5分6―10からみせた中大の反撃は鮮やかで7分佐藤要の7MTを口火に9分佐藤光、11分田中、16分佐藤要とアッという間に追いついた。

○……波にのった中大がここでさらに一押しすればいっそうもつれたのだろうが、ワクナガは木野を中心に立ち直り、17分市原、19分森で優位をキープ、23分にも早川がゲットして粘る中大をねじ伏せた。（杉山）

▽B組1回戦

日体大（学推・東京） 19（8―4 / 11―5）9 セントラル自動車（実推・神奈川）

芝浦工大（学推・東京） 22（6―8 / 16―8）16 東京教員（東京）

▽同2回戦

日体大 19（11―8 / 8―8）16 芝浦工大

○……学生勢がまとまりのよさで2回戦へ進んだ。日体大はややもたつき気味だったが、後半はシャープな切りこみと松原の好シュートでセントラルを制した。

芝工大×東京教員は東京の個人技を中心とした粘りに前半はせりあったが次第にスピード差があらわれた。芝工大は後半5分10―8のあと5分間に連続5ゴールをあげて大勢を決め、終盤は大江、新実が交互にポイントして快勝した。（荒川）

○……日体×芝工大。学生同士らしい気合の入ったいい試合だった。

最初のリードは日体が3分松岡のミドル、4分高橋の速攻で奪ったが芝工大も5分明石のミドル9、10分に鮮やかな速攻から木全、大江が決め逆転、12分日体が松原で4―4と追いついたあとは一進一退となった。

しかし20分をすぎる頃から日体が層の厚みをみせて松岡の好シュートなどで再びリードを奪い返した。

全日本総合開会式 第23回全日本総合選手権の開会式は出場チーム代表者会議を兼ねる新しい試みが採られ12月14日午後5時30分から東京・岸記念会館（体協）大会議室で行われた。田村日本協会々長、外山東京協会副会長らの挨拶、前年度優勝チームからの優勝旗返還などがあった。

歴代チャンピオンチーム

	男子	女子
昭12	大塚ク	…………
昭13	日体専	…………
昭15	日体	倉敷高女
昭17	日体倶	倉敷高女
～以上戦前の全日本選手権～		
①昭24	日体桜	愛知ク
②昭25	スワロー松	全山梨
③昭26	東京スワロー	芙蓉ク
④昭27	セントポール	（中止）
⑤昭28	全日体大	全静岡城北高
⑥昭29	全日体大	全静岡城北高
⑦昭30	西日本日体ＯＢ	水海道二高
⑧昭31	全日体大	半田高
⑨昭32	全日体大	愛知紡
⑩昭33	全日体大	愛知紡
⑪昭34	芝浦工大	愛知紡
⑫昭35	芝浦工大	愛知紡
⑬昭36	芝浦工大	愛知紡
⑭昭37	大崎電気	愛知紡
⑮昭38	立教大	大洋デパート
⑯昭39	大崎電気	大崎電気
⑰昭40	大崎電気	大洋デパート
⑱昭41	全立教	大崎電気
⑲昭42	大崎電気	田村紡
⑳昭43	全立教	大洋デパート
㉑昭44	全立教	大洋デパート
㉒昭45	大崎電気	大洋デパート
㉓昭46	大崎電気	日本ビクター

○……後半、日体は佐藤富のゲットなどで11分15－9と安全圏に入ったかにみえたが、芝工大も粘り16分には13－15と追いあげ24分には15－16、がぜんエキサイトした。日体は26分松岡、芝工大は28分新実がゲットして残り2分に勝負がかけられたが日体は巧く芝工大の焦りを誘ってチャンスをつかみ29分松岡、29分40秒高橋精がゴールを決め辛くも逃げ切った。1点のとりあいにスリリングなシーンが連続したが粗暴なディフェンスが目立ったのは反省して欲しい。（大塚）

大同、大崎電気に屈す

▽C組1回戦

大崎電気（協推・埼玉）28（18－3、10－4）7 桜丘会（西日本社会人・愛知）

大同製鋼（実推・愛知）31（16－9、15－4）13 大阪体大（学推・大阪）

▽同2回戦

大崎電気 19（11－6、8－8）14 大同製鋼

得	【大崎】		【大同】	得
0	下里	GK	柳川	0
1	近藤	FP	戸谷	0
7	近森		野田	3
5	飯田		藤中	3
3	東		加藤	1
2	谷口		中井	7
0	籏野		栃原	0
1	佐藤		小沢	0
0	林		小松	0
0	沢田			
19	（3）	7MT	（3）	14

（審・岡前、佐野）

○……1回戦の2試合はともに前半15分で勝負のメドがついてしまった。善戦が期待された大阪体大は中村を軸に速い攻撃を仕掛けたが大同の多彩な攻めにゆさぶられた。桜丘会も精いっぱいの健斗、GK杉山の堅守がなければさらに点差は開いただろう。（奥村）

○……優勝争いともいえる大崎×大同はさすがに見応えがあった。

序盤は大同が押しまくった。3分野田のサイドからの切り込みで先制、中井、藤中のカットイン、ロングなど攻めわけて23分8－4とリードを奪い主導権を握るかにみえた。

ところが大崎は24分から近森、飯田にボールを集め一気の反撃を狙った積極策が成功、両エースも期待に応えて好シュートをとばしタイムアップ寸前8－8に追いついた。

○……後半に入るとペースは完全に大崎のもの。9－9から大崎はパス攻撃で大同のディフェンスを崩し、近森の好リードから谷口、飯田らが矢次早にゲットして12分には14－9と開いた。大同は中井藤中の射つコースをマークされてわずかに7MTでゴールをあげるだけ、大崎の多彩さに一歩をゆずって、前半の先制空しく敗退した。（千野）

▽D組1回戦

スワロー兵庫（教推・兵庫）18（10－7、8－8）15 法政大（学推・東京）

三景（実推・東京）23（12－10、11－8）18 AOK栃木（東日本社会人・栃木）

▽同2回戦

三景 17（10－6、7－7）13 スワロー兵庫

○……予想どおりスワロー×法大が白熱した。たがいに早い攻撃が身上、めまぐるしく攻防が入れかわり前半は決定的な場面もなく4回のタイスコア。後半スワローは立ちあがり井上が連続3ゴールして5分11－9としたのが結果的には勝利につながる〃殊勲打〃となった。この点差が法大へ重くのしかかり1点差に追いこむのがやっと23分13－15から田上、小林で15－15にしたものの疲れがのぞき1分後あっさり北山に16点目を奪われた。その後の好機も拙攻から逃し、28分、29分ベテラン揃いのスワローにダメを押されてしまった。

三景×AOKは三景ペースで運んだがAOKもよく食い下った。三景は後半開始と同時にスパートし10分までに7ゴールをマークして18－8と放し終盤を楽なものにした。（杉山）

○……実力伯仲の三景×スワローは三景のリードで始ったがスワローも畑らの攻撃で盛り返しもつれた。

後半も1点を競うシーソーゲームをくりひろげたが20分11－11から三景は植田、内藤、高梨、上平と速攻をたたみかけ勝利を手中にした。（岡前）

ワクナガ、日体・大崎と分ける

男子決勝リーグ

ワクナガ薬品 8（3－3、5－5）8 日体大　引き分け

得	【ワク】		【日体】	得
0	今井	GK	高橋誠	0
2	市原	FP	氷海	0
2	木野		高橋精	0
1	早川		松原	1
0	森		佐藤雄	2
3	高橋		岩下	0
0	戸田		佐藤富	1
0	松井		喜井	2
0	藤井		浅原	2
			松岡	0
8	（1）	7MT	（1）	8

（審・佐野、岡前）

○……最近にない好試合だった。木野、早川らのコンビネーションのうまさで押すワクナガに対し、日体大は徹底的に走りまくり馬力で対抗した。前半はワクナガが冷静なプレーで先手をとり、半ばすぎまで3－0とした。しかし日体大も終盤で追いあげて3－3。

後半も取りつ取られつのせり合いを続け、15分から25分まで7－7と全くの互角に試合は進んだ。

そして26分、日体大はセットから高橋―浅原と渡るみごとなスカイプレーでポイント、この試合初めてリードを奪い、そのまま逃げ切るかに見えた。

だが、さすがにワクナガはしぶとい。その直後、日体大のチャージングの反則を生かして速攻をかけ28分50秒高橋がゲットして引き分けた。ワクナガがやや有利の予想だったが、日体大は走りまくってワクナガの変化のある動きを消極的にしたのがよかった。（共同通信戦評から）

大崎電気、三景に楽勝

大崎電気 19（10－3 / 9－6）9 三景

○……個人技、チーム総合力ともに大崎が上廻りテンポの早い攻撃で三景ディフェンスを崩した。三景も好選手を揃えているが鋭さに欠け、時おりつかむチャンスも大崎の巧みなディフェンスに封じられてシュートが上ずっていた。

後半、大崎は若手を送りだすゆとりをみせるほどで楽勝だった。（大橋）

	【三景】	得	【大崎】	得
GK	西牧	0	下里	0
FP	山原	0	岩下	0
	喜田	1	近藤	2
	高梨	0	近森	3
	内藤	1	飯田	4
	植田	5	東	4
	武井	0	佐藤	2
	上平	1	籏野	0
	池崎	1	谷口	1
	竹村	0	林	1
			沢田	2
（審・岡村 奥村）	9	（0）7MT（3）	19	

大崎一三景戦　大崎G. K. 下里の好守

大崎、日体大をかわす

大崎電気 11（4－4 / 7－3）7 日体大

○……守りの大崎、速攻の日体大と全く違ったタイプだったが、全日本選手4人をそろえた大崎が実力どおり日体大を押し切った。

前半は両チームとも攻撃にいまー歩のスピードがなく、相手のディフェンスを切り崩せず4－4の互角。

しかし、後半に入ると大崎は近森、飯田、東のトリオが確実にチャンスを活かしてシュートを決め17分までに6点をたたき出して10－4とリードした。

日体大もゴール前のクロス・プレーから松岡が切り込んで得点するなど善戦したが、結局、ディフェンスの差が勝敗を決めた。（読売新聞戦評から）

	【日体】	得	【大崎】	得
GK	高橋誠	0	下里	0
FP	氷海	0	近森	4
	高橋精	0	近藤	0
	松原	1	東	2
	佐藤雄	0	飯田	3
	岩下	0	籏野	1
	佐藤富	1	佐藤	1
	松岡	4	谷口	0
	浅原	1	林	0
	藤田	0	沢田	0
	喜井	0		
（審・佐野 岡前）	7	（0）7MT（0）	11	

三景、前半タイの善戦

ワクナガ薬品 20（8－8 / 12－2）10 三景

	【三景】	得	【ワク】	得
GK	西牧	0	今井	0
GK	大井	0	国本	0
PF	植田	0	戸田	2
	武井	1	高橋	6
	高梨	3	森	1
	内藤	1	早川	5
	喜田	5	木野	5
	山原	0	市原	1
	上平	0	松井	0
	池崎	0	藤井	0
	竹村	0	菅	0
			田中	0
（審・岡村 大橋）	10	（0）7MT（3）	20	

○……三景が最初からスパートしたので前半は見応えがあった。5分あっさりワクナガは4－1とリードしたが三景は喜田が6、7、9分にポイントして同点に追いつき、さらに高梨が13、16分にたくみにワクナガディフェンスをかわし6－4と逆転した。

ワクナガは相手の早い動きにとまどったのか約14分間ノーゴール、19分早川がやっと5点目をマークしたが、すぐ内藤に取り返される拙い運びだった。三景はその後も順調に加点、28分8－6。ワクナガは最後の1分間に早川、木野が強引にゲット、ともかくタイとした。

後半は地力の差がでた。ワクナガは2分木野、4分戸田のゴールでペースをとり戻し、粘る三景から15分以降連続8ゴール、突き放した。三景の試合ぶりはすがすがしい印象を残した。（杉山）

日体大、3位を確保

日体大 19（9－4 / 10－5）9 三景

	【三景】	得	【日体】	得
GK	西牧健	0	野村	0
GK	大井	0	高橋誠	0
FP	山原	0	高橋精	7
	喜田	1	佐藤雄	0
	上平	1	佐藤富	0
	内藤	1	松原	5
	高梨	3	氷海	0
	植田	2	松岡	3
	武井	0	浅原	2
	竹村	0	喜井	0
	池崎	1	藤田	1
	西牧晃	0	岩下	1
（審・佐野 岡前）	9	（1）7MT（1）	19	

○……先制点は三景が2分喜田であげたが、日体は6分松原がすぐはね返しそのあと連続6ゴール、17分7－1とした。日体大のスピードのある攻撃はその後もおとろえず、氷海、松岡らを軸とした多彩な攻撃をみせ、三景ディフェンスは〝統一〟を欠いてキズ口を拡げる一方だった。（大橋）

超一流の試合内容

大崎電気 6（6－5 / 0－1）6 ワクナガ薬品　引き分け

得	【大崎】		【ワク】	得
0	下里	GK	今井	0
1	近森	FP	市原	1
1	飯田		木野	1
0	籏野		早川	0
2	東		森	0
0	谷口		高橋	3
0	佐藤		戸田	1
2	林		藤井	0
		（審・勝岡村）		
6	（0）	7MT	（0）	6

○……すさまじい試合であった。実力伯仲とはまさにこのことをいうのだろう。

前半なかばまでは相手の動きをさぐりあうという戦況。当然のことながら大崎は木野を、ワクナガは近森の動きを食いとめにかかる。15分2－2からワクナガが17分高橋、18分10秒市原と先行、大崎も18分45秒東が返して3－4、しかしワクナガは22分高橋の巧技でまた2点差をつけ突き放すキッカケをつかむかにみえた。

○……大崎のよさが発揮されたのはこのあとである。23分30秒近森が強引に割りこんで4－5としたあと、ワクナガディフェンスの注意を左側の近森－飯田ラインに引きつけておいて東を基点とした右サイドからの攻撃を仕掛けた。27分と29分30秒みごとに右ウイングの林が期待に応えてシュートを決め逆転、ベテランの好リードが若い力を巧く活かした場面であり結果的には林のプレーが大崎に優勝をもたらす一因にもなった。

○……後半はじめからワクナガが押し気味。10分木野が老巧なプレーで7MTを誘い高橋が決めて6－6、この時はまさかこの1点が後半唯一のゴールになるとは思わなかった。

同点になったあとの20分間は史上に記憶されるべき迫力のある展開となった。大崎・近森、飯田らの強シュートはワクナガFPとGK今井の好ディフェンスにはじき返され、一方ワクナガのセットプレーは大崎の厚いシフトにシュートチャンスを容易に与えない。

下里,阻止の内容	
前半6分	（早川）
後半5分	（藤井）
後半17分	（高橋）
後半18分	（木野）

○……両チームが手を変え品を変え攻め守る熱気はスタンドの興奮をよんだ。ハンドボールの新しい醍醐味の発見でもあった。

さらにこの試合を盛りあげたのは大崎GK下里の快技だ。

緊迫した大試合の雰囲気のなかで沈着に7MT5本のうち4本をストップした心・技は驚異的である。

このほか後半だけで11本の強シュートをさばいている。下里の活躍がなければ大崎に栄冠は輝やかなかったろう。

○……終盤5分間、コートもスタンドもいっそうエキサイト。この短い時間にワクナガが4本、大崎1本のシュートを放っているがいずれも実らず、雌雄決せぬまま引き分けとなった。両チームの健斗は久々に充実感にあふれた試合をたんのうさせてくれた。

（杉山）

山陽女高、東女体大破る

女子予選トーナメント

A組1回戦

大崎電気（実推・埼玉） 10（6－5、4－2）7 日体大（学推・東京）

日本ビクター（実推・茨城） 8（4－5、4－2）7 美和ク（東京）

▽同2回戦

日本ビクター 13（4－3、9－3）6 大崎電気

○……大崎、ビクターともにてこずっての2回戦進出だった。

大崎は気力にあふれた日体の速攻に11分3－5と劣勢、しかしそのあと新島の巧技で盛り返し後半開始直後には佐藤が活躍、逃げこんだ。日体はいったん優位に立ったあとかえって粘りが欠けた。

ビクターは危かった。美和クが練習不足を個人技と試合かけひきでカバーしたのは賢明、若いビクターは追いついてはなされ後半2分には4－6となった。しかしいかに巧者揃いとはいえスタミナの差はかくせずビクターは13分6－6に追いついたあと20分江川が初めてリード点をあげ、23分大塚のゲットで辛くも勝ちを決めた。

（清水）

○……ビクター×大崎は7MTの射ち合いに終始した。合わせて12本の7MT（うちビクター7大崎2成功）というのは国内では珍しい記録。大崎は佐藤のシュートで巧くすべり出しながら7MTで追いつかれ、反撃の期待された後半も10分間に7MTで3点を奪われたのが響いた。ビクターは蓮見姉が攻防両面で好リード、特に後半はスピード豊かな鮮やかな試合ぶりをみせた。

（杉山）

▽B組1回戦

東京重機（実推・東京） 9（5－5、4－3）8 東京教大（学推・東京）

田村紡（実推・三重） 15（8－6、7－3）9 鹿児島ク（鹿児島）

▽同2回戦

田村紡 16（5－3、11－2）5 東京重機

○……東京重機×東京教大は教大の粘りでこの日いちばんの好内容となった。立ちあがり重機は得意の組織攻撃で3－0。教大はくじけずセットから着実にシュートを決め15分3－3、17分には韮沢が決めて5－4とリードを奪った。

後半に入ると重機は再び攻撃に

テンポがのり鈴木、村上らで11分には9−5とはなした。
教大は12分すぎから再び反撃、21分継のシュートで8−9まで迫ったのだが重機も懸命に守り切った。田村紡×鹿児島クは鹿児島の積極的な試合ぶりでもつれ前半6回タイとなる熱戦を演じたが、後半田村紡は辻のゲットで10分11−6と主導権を握りそのまま逃げこんだ。（清水）

○……田村紡×重機は期待はずれの凡戦。重機は再三チャンスをつかみながらシュートが甘く田村にペースを奪われ、特に後半は一方的な経過となった。
田村紡は8ゴールをあげた広森の進境が目立った。（杉山）

▽C組1回戦

山陽女、ブラザーには及ばず

ブラザー工業（実業・愛知）24（15−3 9−3）6 徳山OG（社会人・山口）

山陽女高（高推・広島）13（4−6 9−0）6 東女体大（学推・東京）

【東女】	得		【山陽】	得
増田	0	GK	玉谷	0
安井	0	GK	三紙	0
高橋	1	FP	村岡由	3
堀江	2	FP	和久井	0
川井	3	FP	町田	2
屋良	0	FP	折口	3
西田	0	FP	村上	4
本告	0	FP	横山	0
石井	0	FP	蛸瀬	1
藤森	0	FP	灘	0
石塚	0	FP	中元	0
		FP	村岡美	0
6	（0）	7MT	（2）	13

▽同2回戦

ブラザー工業 8（3−3 5−1）4 山陽女高

○……ブラザーが徳山OGにあっさり和歌山国体の〝借り〟を返したあと山陽女高が大逆転をやってのけスタンドを沸かせた。
若さで走りまくる山陽は前半2〜6分速攻で2−0とリードしたが東女体大もローリングオフェンスから川井のシュート力を活かす策戦で一気に5ゴール、一日の長を思わせた。ところが後半に入るや山陽はスピード豊かな攻撃で4分たらずの間に町田、村上、折口、村岡由がたてつづけにゴールして逆転、さらに攻撃の手をゆるめず、村上の3得点、村岡由、蛸瀬らで加点した。東女体大の甘いシュートからの逆速攻、セットからのロングなど高校ばなれした攻撃ぶりと、東女体大を後半4本のシュートにおさえこんだ守備力は鮮やかだった。（大塚）

○……山陽女高が実業団に挑んだ一戦はブラザーが後半地力勝ち。
波にのる山陽女は前半互角に戦い期待をもたせたが、ブラザーは後半シュートが安定、5分、13分エース金村の強シュートで優位に立ち、得点を重ねた。山陽女高はシュートがバーやポストに当たる不運はあったものの22分の7MT（村岡）1点に留り力負けだった。（奥田）

ビクター接戦を乗り切る

女子決勝リーグ

ブラザー工業 8（4−2 4−3）5 田村紡

【田村】	得		【ブ工】	得
久保	0	GK	佐藤	0
金田	1	FP	山田	0
久保田	1	FP	藤浪	1
辻	0	FP	鳥居	4
広森	1	FP	金村	2
紀平	0	FP	藤田	0
沖	0	FP	長塚	1
沼田	2	FP	森本	0
若林	0	FP	原川	0
		FP	平	0
		FP	森	0
5	（1）	7MT	（1）	8

（審・斉藤・千野）

○……前半なかばすぎまで1−1はげしい動きも決め手を欠いて空まわりの感じだった。
試合の流れを変えたのは17分ブラザーの7MT。焦る必要もなかったのだが田村紡はそのあと2回の反撃機をパスミスで失ったばかりか、ブラザーの速攻をあびて19分4−1と開いた。
後半開始直後、田村は金田のゲットで差をつめたが余裕のあるブラザーは、5分5−3、10分6−3、15分7−3とがっちり先行、守っても広森の動きを封じこめ、GK佐藤が4本の7MTのうち3本を捌いたプレーも勝因につながった。（杉山）

日本ビクター 4（2−0 2−2）2 田村紡

【田村】	得		【日ビ】	得
久保	0	GK	渡辺	0
		GK	鈴木	0
金田	0	FP	蓮見姉	0
紀平	0	FP	江川	2
久保田	1	FP	八重樫	0
辻	0	FP	蓮見妹	1
広森	1	FP	阿部	0
沖	0	FP	大塚	1
沼田	0	FP	富山	0
若林	0	FP	谷沢	0
		FP	山口	0
		FP	高野	0
2	（0）	7MT	（1）	4

（審・斉藤・千野）

○……田村紡が押し気味に試合を

進めたのに、得点の方は日本ビクターが3分に江川、21分すぎに蓮見妹と決めて2点をあげた。

後半の開始直後、ビクターの江川が再度得点のあと、田村紡が2分すぎ久保田、広森で連続ゴールしてビクターに迫った。

その後試合は激しいせり合いが続いたが、19分にビクターの富山がダメ押し点をあげ試合を決めた。

（毎日新聞戦評から）

ブラザー、後半の反撃遅し

日本ビクター 6（5—3 / 1—2）5 ブラザー工業

○……点差のワリには、手に汗を握る場面が少ないというか、ジレッタイというかとにかくスカッとしない試合だった。

前半、両チームともシュートチャンスは数多くありながら、今一歩の決定打が出ない。

得	【ブ工】		【日ビ】	得
0	佐藤	GK	渡辺	0
0	藤浪	FP	蓮見姉	2
3	鳥居		江川	1
0	藤田		八重樫	1
0	長塚		蓮見妹	0
2	金村		大塚	1
0	平		富山	1
0	原川	（審・斉藤 千野）		
5	（1）	MT 7	（0）	6

ビクターは蓮見姉が良く決めて2点差で後半を迎えた。

後半のブラザーは見違えるばかりの動きを示した。守っても、良くボールにつめ、ビクターにチャンスらしいチャンスをほとんどあたえなかった。

攻めても、金村がミドルのアンダーシュートを試み、成功するなど、前半とはうってかわって、ブラザーペースになった。守りはまず完全だし、容易にビクターの追加点は許しそうもない。攻撃は歯車がまずまず嚙みあっている。逆転は時間の問題と思われたが、肝心のシュートがバーやキーパーにあたってしまう。もどかしさと焦りも手伝い、結局はビクターに逃げこまれてしまった。

両チームとも初栄冠がかかっていたせいか、今一歩の迫力にかけた。

（藤本）

○……初の予選トーナメント・決勝リーグ制（注・女子は第17回大会でいちど採用）は成功した。

オリンピック予選での快勝という好材料も手伝ってはいたが、全期間の盛りあがりが感じられたのは精鋭主義の所産とみたい。

一回戦からワクナガ薬品（大阪）×大阪イーグルス、スワロー兵庫×法政大（東京）〜以上男子〜大崎電気（埼玉）×日体大（東京）、東京重機（東京）×東京教大〜以上女子〜といった好カードがファンを喜こばせ大会の雰囲気を高めた。

○……昨年までの32チーム参加（男）から一気に半数にしぼったことに対し、一部で批判はあったようだが仮にもナショナルチャンピオンを決めるとなれば、今回の数字は妥当なところだ。

将来、ヨーロッパ各国の採っているトップ・エイトのリーグ戦形式に進むためにも貴重な第一歩を踏み出したといってよい。

○……初めて、ということで見逃されたものの改良すべき点も多い。

特に「全日本総合選手権規程」の成文化はすぐにでも着手しなければなるまい。権威づけという意味からも必要であり、本来なら今年にまにあわせるべき筋あいのものだった。

出場チームについても研究の余地を残した。

成果あった "精鋭" 主義

今回はいわゆるタテ割り—加盟団体が基準とされたが、このため二つの課題が生じている。

○……一つは第一次推せんチームが辞退または棄権した場合に繰りさげを行うことによるレベルダウンである。

例えば全日本実連代表の三番手住友化学菊本（愛媛）の辞退で本田技研（三重）が推され、和歌山国体後、同チームの棄権によってセントラル自動車（神奈川）が浮上したケース。このような時はやはり住友辞退の時点でワクを日本協会に一応返上し、改めて配当を協議すべきではなかろうか。

○……第二は日本協会の "組織" が一部を除いてまったく無視された点だ。組織の代表となったのは男子は開催地1チーム、女子は開催地と次年度国体開催地の2チームのみである。これでは「日本協会は組織を軽視し、加盟団体偏重にすぎる」といわれても仕方がない。

協会内部でも「前年度優秀1、加盟団体推せん5、ブロック代表9、開催地代表1＝計16」がノーマルな数字という反省があるようだ。

このほか観客動員、競技委員と競技者（監督、コーチ、選手など）との兼務なども改善の余地を残すものといえる。

（S）

決勝リーグ勝敗表

（男）	大	ワ	日	三	P	得	失
①大崎電気	…	△	○	○	5	36	22
②ワクナガ	△	…	△	○	4	34	24
③日体大	●	△	…	○	3	34	28
④三景	●	●	●	…	0	28	58

（女）	ビ	ブ	田	P	得	失
①ビクター	…	○	○	4	10	7
②ブラザー	●	…	○	2	13	11
③田村紡	●	●	…	0	7	12

Pはポイント（勝ち点）

全日本総合に拾う

三菱鉛筆に恩返し
——初優勝のビクター

○……ハチ巻き姿の応援団が歓声をあげ、踊りださんばかりに喜んでいる姿とはまるで対照的にどの選手も涙を流し、しばらくは言葉もかわさぬ沈黙がつづいた。

初優勝の感激、それだけではなかったのだ。

御承知のファンもあるだろう。優勝の原動力となった蓮見姉、江川、八重樫、阿部らは一昨年まで池田鉄哉監督（芝工大ＯＢ）の率いる三菱鉛筆（神奈川）の主力として活躍した選手。昨年春、会社側の事情で廃部が決まり、ハンドボール界から姿を消した。

○……実業団球界のＡクラス、当然他のチームから入社の勧誘の声がかかり、大学進学を打診された選手もいた。しかし「これまで苦労をともにした人のことを考えると単独行動はとれない」とほとんどの選手が故郷にもどる手続きをしたのだがその矢さき、チーム結成を企っていた日本ビクター（茨城）から「全員入社」を呼びかけられたのだ。

○……捨てがたいハンドボールへの愛着と前の会社への義理。円満退社とはいえこの板ばさみは乙女心を悩ませた。

彼女たちを〝決心〟させたのは三菱鉛筆時代の部長・猪狩武春氏の「三菱で果せなかった全国優勝の夢をビクターでかなえてごらん」という暖かい一言。

アマチュアスポーツ界でも異例という監督以下主力全員の転籍がこうして実現した。

○……三菱とビクターへの恩返し。池田監督、選手たちの〝負担〟は以前よりむしろ厳しくなった。それに打ち勝っての全国優勝、スタンドの一角で見守る猪狩氏の姿が印象的だった。

〝引退〟を一年延ばして頑張った蓮見姉と江川。お嫁いりも近いという。二人の手に握られた優勝メダルは勝利の女神が贈ったなににも優るプレゼントであろう。

〃〃〃 顔色なし大学勢 〃〃〃

女子の大学勢が第1日で全滅。これには学連関係者ばかりか日本協会役員もガックリしていた。

今大会は実業団が主力を欧州に送りこんでおり〝鬼のいぬま〟の好機(?)だったのだがその期待も裏切られた。

実業団のある若手は「どんな場合でも大学には負ける気がしない」と強気だし、東女体大を一蹴した高枝チャンピオン山陽女高も「胸を借りるつもりでしたが…」と期待はずれの表情。大学チームが第一線に飛び出すのはいつの日のことだろうか——。

〃〃〃 クラブチーム散る 〃〃〃

新システムの採用で男子2（ＡＯＫ栃木桜丘会）、女子1（徳山ＯＧ）のクラブ代表のほか女子に美和ク、鹿児島クと合わせて5つのクラブが登場。いずれも第1戦で善戦及ばず散ったものの恵まれぬ条件をのりこえての試合ぶりはさわやかな印象を残した。

どのクラブも「実業団や大学チームをてこずらせれば充分」と割り切っていたが、主力はいずれもかって檜舞台で活躍したキャリアの持ち主。なかでも早川、杉山（旧姓笠原）、黒川、加藤、ＧＫ田口（旧姓川崎）ら往年のナショナルプレイヤーがエントリーした美和クは優勝した日本ビクターを窮地に追いつめる活躍でスタンドの拍手をあびていた。

〃〃〃 伯仲の個人技 〃〃〃

アジア予選の主役・ナショナルプレイヤー16人のうち有永、斉藤、大村を除く13人が久々に自チームから登場、スタンドから『さーすが』の声がとんだ。

木野（ワクナガ）×ＧＫ本田（大阪イーグルス）の〝対決〟をはじめ大崎×大同、ワクナガ×大崎戦では激しい個人技の応しゅうがいやが上にもムードを盛りあげた。スタープレイヤーの巧技、妙技がみどころの一つになるなど日本ハンドボール界の成長を物語るものでもあった。

〃〃〃 後半1点の珍記録 〃〃〃

男子優勝をかけた大崎電気×ワクナガはまれにみる肉弾戦。後半の得点がワクナガの一点だけ、それも7ＭＴ。フィールドゴール両軍0という珍記録はちょっと前例をみつけ出せない。

23頁より続く

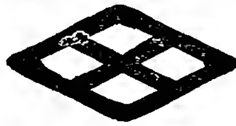
有の練磨に加うるに実戦の経験を上積みしかつ消化吸収し、ミュンヘンオリンピックは既に始まっていると考え、仮想敵国の研究に旺盛なる意欲を燃やし、最善の手段をもって東洋の離れ小島の不利を克服する努力を示してもらいたい。

各位常に日本ハンドボールの最重要構成員たる責任を自覚し、孜々として努力し、実力の満を持して放つべきミュンヘンオリンピック大会に備えてこそはじめて全国の愛好者にその大任を果すことは証明出来るのである。

天は唯平素の鍛練に努める者に対しては戦わずして勝利の栄冠を授けると同時に、一勝に満足してお山の大将に安んずる者からは直ちにこれを奪い去ってしまう。

古人曰く、「勝って兜の緒を締めよ」と。（投稿）

合織糸・合織混紡糸



田村紡績株式会社

社長 田村正衛

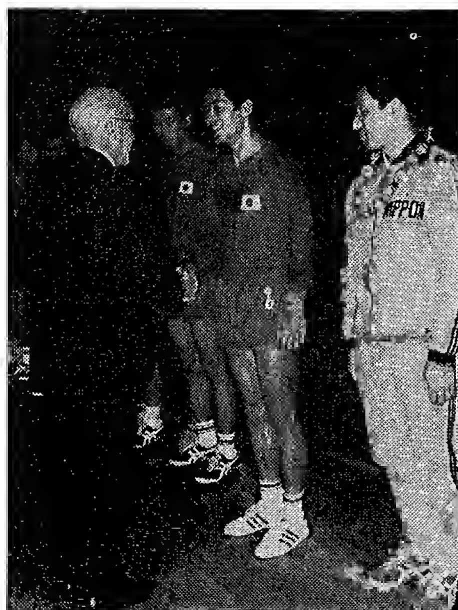
四日市市東茂福町10―17
TEL 四日市 6―2156（代表）
郵便番号 512

アジア予選回顧

日本に新たな責任かかる

～アジア代表権を獲得して～

久田　暁


認定式で木野主将を祝福するホルル委員長（左）

関係者が大変な苦労をして日本ではじめて開いたオリンピック・ハンドボールのアジア予選はその甲斐あって感激の日本優勝ということで幕を閉じた。ＩＨＦの技術委員長エミール・ホルルさんが終了式の時、村田監督、竹野コーチ木野主将にそれぞれ記念のレイを首にかけ両こぶしを握って高くかかげた時ミュンヘンへの実感がぐっとこみあげてきた。そして田村会長らの胴上げ、日本ハンドボール関係者の誰もが理屈と恩しゆうを越えて待ちに待った瞬間であり子供のような純粋な感激の涙に思わずむせんだ一時であった。スタンドではイスラエル選手団もおしみない拍手を送っていた。その時私はイスラエルと韓国の団長が私に語ったことばをふと思い浮かべていた。ムクシー団長は日本が４年間もナショナルチームの強化を続けていることにおどろきその恵まれた環境をうらやましがっていた。国家が非常時にあるイスラエルはスポーツのために多くの時間と経費をかけられずナショナルチームの強化は二年にも満たないとのことだった。一方、朴団長も長身者をサッカー、バスケット、バレーの種目にとられ小型チームの悩みを訴え、また大学選手は卒業と同時に全員三年間の軍隊生活に入るため男子実業団チームの育たないこと、日本の自衛隊とちがって北韓国（と彼らは言う）との緊張の対しょが常に続いてる中で韓国の軍隊はスポーツなどやる暇もなく軍事訓練に明け暮れている。勢い高校生まで編入してナショナルチームを作らねばならぬ状態でありイスラエル同様、国家の色々の事情がからんで長期にわたるナショナルチームのまとまった強化はむずかしいと語っていた。こうした各国の苦しい事情の下に行なわれた本予選大会はいわばアジアハンドボール国同志の血のにじむような苦労を乗り越えて実施されたものでありアジアのハンドボールの友が固く手を結んで共に発展する礎を築いたということでまことに画期的であり意義深いものであった。彼らはみな素朴で純情なスポーツマンであり紳士だった。大会の終るころには言葉の壁を乗越えて両国は心を通い合わせお互いに敬愛している様子がほほえましかった。できることならイスラエル、韓国、日本の３国が手をとりあってミュンヘンに行きたい気持ちにかられたのは私だけではあるまい。大会最後の夜サヨナラパーティで友好の輪に花が咲いた。予選でしのぎをけずったハンドボールの友が一同に会し明るいふんいきと健康な笑いが絶えず、ＩＨＦ役員のあいさつが一際厳粛なひびきをもった。ヨーロッパにくらべてすべてが幼いという感じのアジアのハンドボールの成長への努力をまのあたりに見てＩＨＦの方々も暖い心で声援し見守って行ってくれるだろう。また、韓国朴団長は次のようにあいさつされた。

「日本がアジアの代表となったということは韓国、イスラエルを代表していることでもあり、ハンドボールにおいて後進性のあるアジア諸国のためにオリンピックでは十分に活躍してアジアのハンドボールの存在を示してほしい」アジアでの先輩国日本の使命と責任は一層大きくなろう。そして一日も早く世界の一流ハンドボール国となるのが日本の目標である。オリンピック選手に続く若手有望選手が続々と育つことを願ってやまない。

（日本協会国際部長）

再び全日本を激励する

光島磯雄

幾十箇月の長期にわたる全日本チームの育成強化事業ははや昭和四十六年の過去のものとなり、ここに全日本チームは今やその所期の任務を終了し新たな段階にむかって再出発の道を歩むこととなった。しかしながら我々ハンドボール愛好者の全日本チームに対する責任は決してこれがために軽減されたのではない。過ぎし十一月の決戦の成果を永遠に強固なものとし、なおますます日本ハンドボール界の隆昌を維持促進するためには、オリンピックの年であると否とを問わず、倍旧の後援会活動に総力の結集を惜しむものではない。

日本ハンドボール界の記念すべき一九七二年の年頭に際し、拙筆ではあるが、再び激励文を綴らせていただく。他山の石として拾っていただければ幸と考える。

競技力なるものは、体格、体力、技術の習慣的進歩のみをいう

のではなく、これを臨機応変に活用する無形の実力をいうのであって、一発必中のシューターはよく十発一中のシューター十人に勝ることの真意を理解し、競技力を常に可視的状態に発揮出来るよう心がけなければならない。十一月我が全日本チームが勝利を得たのも指導陣、選手各位の平素からの研讃練磨がその因を成し果をもたらしたものであって、もしそれをもって将来を考えるときは、代表決定戦が終った今日といえども安閑として休憩の気分に浸ってはならないのである。

いうまでもなくスポーツ者の一生は連綿たる不断の戦争であって試合の有無によらずその責任に軽重あるはずはない。試合には全力を発揮し、試合のないときは練習を欠かさず、終始一貫その本分を尽くすことのみ、過去数年間風雪と戦い、寒暑に抗し、しばしば強敵と対して優勝劣敗の間に出入したこともとより容易の業ではなかったが、考えてみればこれまたすべて長期にわたる練習の過程であり、これに参加し多くの啓発することを得た各位の幸福は他に比較すべきものなく、これを苦労難儀と大げさに言うべきものではあるまい。いやしくも全日本チームの一員として一時の勝利に安んずることありとすれば、外観は絢らん豪華にみえようとも、あたかも砂上の楼閣の如く、暴風一過たちまち崩壊するであろう。この点深く考えてもらいたいものである。思い起すべし、六月のＮＨＫ杯大会における拙劣な戦いぶりを、また九月の対スウェーデン戦における非力を!!。あのときと今とはちがうなどというなかれ、今にいたるも多くの愛好者は八十パーセントの信頼をも信託するには不安定な要素のあることを知っているのである。

欧州に眼を転ずれば、現今の各強国すべてその民族、国家の歴史的背景のもとにその力を保持し、常時試合、常時練習の気構えによる実力の向上に努力していることは明々白々である。またアジヤに眼を向けても、現在の複雑なる国際情勢がスポーツに及ぼす影響ははかり知れぬものがあるが、我々は常にそれを予察しなければならないのである。過去に強かった国が弱くなり、またその逆の国のある事例は古今東西の歴史の示すとおり政治のもたらす要素が多いことは事実であるが、基本的には常に競技場にありの心境、緊張を保つ度合が民族的資質からみて高いか低いかによる自然の結果によらぬものはないのである。端的に言うならば、執念深いかどうかによるといえよう。

各位よ。多忙であろうが欧州各国（仮想敵国と考えて）の歴史、風土、民俗に関する関心興味をも持たれよ。たとえばハンドボール発祥の地とされるドイツを考えることによっても、おのずからロシア人、フランス人、北欧、東欧各国の民族性に由来するハンドボール性格の一部といえども把握出来るのであって、しかもこれこそ各位の競技力向上の一策としての重要な役割を果すであろうことを確言してはばからない。そしてもう一つ、内外の「戦史」を読むことも有益であると申し上げる。

全日本チーム各位におかれては、これらの事例を鏡として、既

（20頁に続く）

不振だった東京4戦の運営面の反省

アジア予選における東京大会の観客動員数が〃話題〃になっている。すべてに順調、大成功をおさめた今大会で、これは唯一といってもよい反省点であり、今後の課題として考えなければいけないだろう。

東京大会入場者数

第1戦	（日―イ）	3,900名
第2戦	（韓―イ）	1,000名
第5戦	（イ―韓）	400名
第6戦	（日―韓）	4,000名
大　阪	（日―韓）	3,700名
名古屋	（日―イ）	4,500名

韓国×イスラエル戦の不人気は前売券の状態から推してもある程度予測はできたが、それすらも下回る数字であった。

しかし、なんといっても東京大会の低調は国内ファンの動員に原因があった。

特に第1戦が七分の入りに留ったのはショックで、しかも「強制的に入場券を買わされた」という声が耳へ入るに及んで協会役員はいっせいに頭をかかえていた。

千円、五百円の入場料、ほかに中高校生三百円（第1・2戦）というのは日本協会の台所、〃オリンピック〃というキャッチフレーズ、さらには総務企画部が青少年の日常消費資料まで持ち出しての数字であった。無暴な額とは思えない。

第1戦の前売券が都内のファンよりダイレクトメール予約による地方のほうによく伸びた傾向もみつめなおさなければなるまい。

つまり「東京における不人気」である。

ハンドボールを自ら進んで見に行きたい、見たいという層が大阪・名古屋に比べて東京は少ないのだろうか。

そうではない。当日のＴＶ中継視聴率は東京、大阪、九州、名古屋の順であるし、視聴者の年代もＮＨＫの調べでは東京地区はホワイトカラー、高校生、大学生の順であったという。

会場まで足を運ばせる力がやはり欠けていたということになろうか。大阪協会や愛知協会の役員はズバリ「東京の日頃の一般対策の欠如」と指摘する。

また、東京大会だけ日本協会の〃自主興行〃という変則的なシステムを採った点にも反省が残ろう。

「汽車賃を使ってわざわざ見に来たのに東京の関係者やファンはいったいどうしたのですか」とけげんな顔というよりも情けなさそうな顔をした地方の愛好者の声を素直に聞かねばいけない。

首都における人気、不人気の差は有形、無形の影響を及ぼす。

団体動員をして頭数（あたまかず）だけを揃えればよい、という時代ではなくなった。とすれば日本協会のおヒザ元での盛りあがりをいかに上向きにしていくかは斯界全体の課題ともいえるだろう。今のままでは世界選手権の誘致どころか、三国対抗程度の国際大会ですら開催能力はないとしなければなるまい。

（Ｘ）

―ポスト・アジア予選④―

役員の若返りと体質の改善

～日本協会～

□……アジア予選の成功は日本協会の体質を変えることにまでつながるだろうか。

日本協会をよく知る者にとってこれは一つの関心事である。

昭和12年創設以来、まだ35年しか経過していない斯界はすべてに幼く、時にはその稚拙がトラブルを生んだ。しかしいつの場合も「過渡期だから……」ということでその場を切り抜け、損得勘定は合わないにしてもそのトラブルが小さな前進へのステップになっていた

□……今回の快勝は、大げさにいえば、斯界が自力で築きあげた初の金字塔である。

日本協会役員がさかんに口にした「挙国一致」という時代がかったアピールは大きな効果があったようだし〝この2週間〟をすべての力でたくましく支えていたこともはっきり感じとれた。

問題はこのムードをどう持続させ、さらにいっそう「ハンドボールの位置」を高めさす努力に結晶させるか、だろう。

□……その一つの〝形〟として「新旧交替はこの機をおいてほかにない」という声がある。

たしかに、日本協会の施策はマンネリズムにおちいっているし、新鮮な企画力にも乏しい。あまりにも〝過去のケース〟が持ち出されすぎるのも弊害だ。これを打破するには新しい感覚の投入が唯一無二の〝特効薬〟である。

□……ここ一、二年理事陣にも若い人材が登用されているが、それでも全般的な印象はフレッシュと映らない。

若返り説の急進派は杉山常務理事だ、という。面白いことに彼は現執行部でも若手なほうだが「まだ不足」としている。

彼の意見は『私自身も含めて旧人が城をゆずる時期に来ていると思う。国内が7人制に統一されてはや9年経った。統一後に学窓を卒えた若いOBの数は充分なハズだ。彼らに日本協会のさい配を揮はせてみたらどうか。日本協会の役員は中央地方を問はず、あまりにもややこしい人間関係の糸で結ばれすぎている。これをほどく必要もないがそのまま放っておいてはおいけない。アジア予選の勝利は古いOBの結束した勝利であり、若い時代へこれほどいい〝遺産〟はない』と断言する。

□……若返りには心配がつきものだ。

スポーツ界はよきにつけあしきにつけ〝顔〟がモノをいう。

新しい役員の登用は、せっかく築いたベテランの利点を白紙に戻し、何かと不利にならざるを得なくなる。

また、交替当初はとまどいもあって一時期は足ぶみどころか退歩する〝期間〟もあろう。しかし、その取り返しは容易だし、意義があるのではなかろうか。

□……今のところ新旧交替に関して表立った動きはないが「ミュンヘン出場」が旧人たちの勇退のかっこうの時代であることは、一部のベテラン理事たちも口にしていることだ。

それは「自分たちの時代は終った」というニュアンスではなく、「35年かかってオリンピックまでこぎつけた。あとは頼むぞ」の心境である。

□……新しい感覚を投入して日本協会の体質をどう変ぼうさせるのか、何故その必要があるのか、新旧交替は急がず〝時〟の解決を待つべきだという声もある。

多くの読者が抱かれる疑問でもあろう。

人脈の清算、国際感覚の盛りこみ、新しい企画の実行、長期的な事業のスタート……。

いうまでもなくこれは日本協会の体質そのものである。

極言を許されるなら旧人が勢力を得ている間は、一部的に、散発的にこれらの課題が解決されてもしっかと大地を踏まえて根がおろされることの可能性はうすそうだ。

□……アジア予選での勝利、ミュンヘンオリンピックへの出場で斯界はこれまで以上に厳しい世論に取り囲まれるであろう。

その時に旧態依然の体質をベースにした日本協会運営でよいのだろうか。ノーである。

現執行部が積極的、意欲的な〝連帯感〟をもって体質改善に乗り出さぬかぎり、ヤングパワーの進出を望む声は日増しに強くなるであろう。

同時にこれまで学連、高体連、実連、教職連、自衛隊連といったタテ割りが、ともすれば組織である地方協会より重視されて来た風潮もここらで是正しておく必要があるのではなかろうか。

現役員の任期はあと1年2ケ月来春4月には地方協会もふくめてかなり大幅なスタッフの若返りが実現されるとみたい。

それが〝モントリオール対策〟の第1歩になるかもしれない。

―ポスト・アジア予選⑤―

〝日本リーグ〟は実現されるか

□……これまで何回か噂が流れ、いつのまにか立ち消えになっている「日本リーグ」問題。この上げ潮の時を逃しては二度と旗あげのチャンスはないだろうといわれているが、果して実現へ歩みを進めることができるだろうか。

結論から先にいえば、本誌が取材した範囲では、そうした動きはいぜん煮つまった状態ではなかった。

□……日本リーグ問題は43年2月の全国評議員会で全日本実連に一任され、同連盟ではその年9月「女子開催、男子見送り」という結論を出し、日本協会あてその旨の答申書を提出した（関連記事・本誌58号参照）

ところが、それ以後いっこうに進展していない。

問題を委託しながら答申書そのものの審議さえしていない日本協会のずさんさは責められるべきだが、当時「日本リーグはもうすこし時機を待ってから」というムードがあったことも確かだ。

□……「待っていた時機とは今をおいてあるまい」――開催論が再燃したのも当然であり、4年前の時点よりも周囲の条件が〝好転〟していると考えるのも誤りではなかろう。

地方の関係者やファンの間には以前から「トップチームの対戦を見たい」「バレーボールと肩を並べる意味でも……」と日本リーグ待望の声は強く、それにプラスしてのオリンピックムードである。

□……日本リーグのメリットは多い。頂点強化にはかっこうだし、ファン獲得にもつながる。

プレイヤーなどいわゆる〝現場〟からも「強チーム同士の試合」を望む声は高まっており、有力実業団が一堂に会して手合せするケースや、大学×実業団の定期戦などが、ここ一、二年目立っているのもそうした傾向のあらわれといえなくもない。

またメンバー不足に悩む実業団の監督のなかには「日本リーグに出場することで新入部者の勧誘が容易になるのでは……」と期待する声もある。

□……飛び出す態勢充分でありながら、さぐりをいれると逆な結果が出てくる最大因は予算の裏づけがあと一歩見込めないからだ。

現在、国内スポーツ界では日本リーグを実施しているのはサッカー、バレーボール、バスケットボール、アイスホッケー、女子ソフトボール、アメリカンフットボール（社会人）の6競技。いずれも多くの観衆を動員して競技収入をあげ、テレビ局からもかなりの放送権料を得ている、と伝えられる。

ハンドボールの場合、この両面に限界があるようで、実現しても参加チームがかなりの経費を持ち出さなければならない。

「学生チームはとてもつきあいきれない」（田中中大監督）だろうし、実業団側も大半のチームは今のところ「額にもよるが、そこまでして……」といったムードが強い。

□……3年間にもうひとつ大きな流れの変化があったこともこの問題を〝ふりだし〟に戻した一因になっている。

女性上位からはっきりと昨秋を境に男性上位となった点である。

前掲の答申書提出時点では、まだまだ男子は学生界が主流であり、東西をはじめ各地の学生リーグが充分に日本リーグの長所を備えていた。ところが短い期間で男子も実業団上位時代が出現、さらに期待された全日本女子が世界選手権（別掲）を不本位な成績で終ったことも重なり形勢は逆転した。

□……日本協会長であり、田村紡（三重、全日本3位）のオーナーでもある田村正衛氏は「仮に日本リーグができても男子優先であろう。女子は一歩後退だ、実力的にも大洋デパート（熊本）はともかく、他のチームはファンを集め得ないだろう。その点男子はオリンピック予選をピークとしたナショナルチームへの関心で、よい意味でのスターが輩出、しかも各チームに分散しているのはいい」といっている。

田中全日本実連理事長も同じような意見だが「女子実業団は会社側の全面的理解の上に立っているチームがほとんどだが、男子はまだそこまでいっていないチームも多い。リーグを行うには最低6チームは必要だし…」との心配もある。

ここらあたりがやはり〝ネック〟なのだ。

荒川理事長をはじめ日本協会首脳陣も誰もが「ばくぜんとはしているが」と前おきして「今はまだムリじゃないかねェ」と異口同音にいっている。

ちなみに2月の全国会議（理事会・評議員会）の議題に日本リーグに関する件は一つもない。

ポスト・アジア予選⑥

立ち遅れている〝女子対策〟

□……世界選手権（12月・オランダ）へ気負いこんで送った全日本女子が1勝もあげ得ずに終ったことは日本協会関係者に大きなショックを与えると同時に、〝女子問題〟をふり出しへ戻すきっかけにもなった。

ここ数年、斯界は「ミュンヘンミュンヘン」に明け暮れ、女子の立ち場は片すみに押しやられた感じ。一九六八年のモスクワ大会が流れた不運も手伝った。

□……女子の国際交流はただでさえ少ない。

過去35年の球史で、外国遠征は昨冬をふくめて3回、外国チームの来日も42年の西ドイツ選抜、46年の白花醸造、梨花大（いずれも韓国）を数えるだけだ。

キャリアがモノをいう国際舞台でこのハンデは大きい。「男子偏重の犠牲」という言葉はきつすぎるにしても「女子に目標が少なすぎる」のは事実。

□……日本の女子への評価は高い。世界選手権で最下位に終ったことは、国際連盟筋やヨーロッパ関係者の間でも「意外」という声が強かったようだ。それだけに国内の女子対策の遅れがここで大きな課題にもなるのである。

山田計全日本女子監督の帰国談は「日本は近い将来、かならず世界の王座を狙える」と強気だが「しかし」と宇津野年一、井薫両コーチ「男子のような長期的な強化対策をとることが条件だ」……。

今回の場合、女子としてはかってない強化合宿をつんだが、やはり男子のオリンピック対策と並んではいろいろなシワ寄せが生じてくる。しかも、これは日本の女子強化にとって宿命的なモノになりそうな気配。

□……IHFが開催サイクルを変えないかぎり国際行事は別表のようになる。

1972	◎ミュンヘン
1973	男子世界選手権
1974	女子世界選手権
1975	…………
1976	◎モントリオール
1977	女子世界選手権

◎印オリンピック

女子はどうしても男子のあと、あとを追い、いきおい強化も男子優先になるのではなかろうか。

一部に噂される男子世界選手権をオリンピック中間年に固定化、4年おきに開くという説が採用されても結局は男—女—男—女となってしまいそうだ。

□……このリズムを女子主体に置きかえるには女子界自体の力以外にない。

欧州球界の実情にくわしい人たちは「日本の男子が国際ハンドボール界で確固たる地位を築くのはなみたいていではない。女子のほうが有望」という。

なかには「いっそ、女子重点に切り替えたら」と極論する人もいるのだが、せっかく盛りあがったオリンピック・ムードをおさえてまで方向は替えられまい。

□……一方、女子のレベルが高いといっても一にぎりのプレイヤーだけ。全般的な内容はお寒い限りで、最近を例にとっても大洋デパート（熊本）という大チームは輩出したものの、後続チームとの開きが大きすぎる。この層のうすさが今回の成績にはね返ったのだとみる人もいる。

たしかに世界選手権での敗退のほか今シーズンだけでも女子界には三つのショッキングなできごとがあった。

全日本実業団（昨年6月）でゲストチームの白花醸造（韓国）にあっさり3位の座を握られたこと

和歌山国体（同10月）で〝2軍〟の大洋デパートが優勝をさらったこと。

全日本総合（同12月）で高校チャンピオンの山陽女高（広島）が全日本学生2位の東京女体大を一方的に押しまくったこと。

一つ一つの背景が今の女子界の欠点につながっている。

□……いずれにせよ国内の女子対策を改めて一から考えなおす時機を迎えたことだけははっきりしているようだ。その作業をとおりこして、頂点世界にばかり目が注がれてしまっては拙い。国内における試合数の増加もテである。

全日本総合選手権も女子だけは予選トーナメントの敗者で順位リーグを行うとか、学生界も旧態依然の大会に甘んぜず積極的に〝前進〟を企らねばなるまい。

実業団×学生の交流大会、全日本学生選手権のリーグ戦化（予選リーグまたは決勝リーグ制）、関東、関西、東海なども春秋2シーズン制を廃めて一シーズン制6回総当りぐらいの思い切ったアイディアが欲しい。

□……日本協会内に女子専門部（仮称）を独立させ、女子に関するあらゆるプランニングをそのセクションで運行させることもよいのではなかろうか。あれこれ考えるよりこの際、現場の意見を吸いあげることが最善の方法と思う。

【「ポスト・アジア予選」は今月号で完結します。（編集部）】

☆★☆★☆★☆★☆★☆★★☆

海外トピックス

杉山　茂

ルブキング復帰の可能性

現代最高のプレイヤーといわれる西ドイツのヘルベルト・ルブキング(30才)がナショナルチームをしめ出されて1年余が経ったが、最近再びカムバックが噂され、ヨーロッパの新聞を賑わしている。

ルブキングはこれまでにナショナルプレイヤーとして公式国際試合に115回出場、599点をあげている名選手だ。ところが一昨年夏、それまで所属していたGW・ダンケルセンから突然ネッテルシュタットに移籍、ナショナルチームのフィック監督は事前に相談もなくナショナルプレイヤーがクラブを替えるのは不謹慎だとしてルブキングを〝除名〟してしまった。

この裏には多額の移籍金が動きアマチュア問題に低触する疑いが濃かったからとも取り沙汰された。

一方、彼一人を欠いただけで西ドイツの戦力はガタ落ち、ファンも敗戦のたびに「ルブキングを戻せ」と騒ぎ、一部の新聞も「ルブキングがいなければ西ドイツはミュンヘンでメダルを狙えない」と報じるなどした。

西ドイツ協会は再三にわたって復帰問題を話しあい、ミュンヘンオリンピック組織委員会まで乗り出す一幕もあったフィック監督を支持する空気が強く、ルブキングのカムバックは望みうすとみられていた。

しかし、今シーズンに入っても西ドイツの成績はいっこうに伸びず、頼れるポイントゲッターもシュミット(グンメルスバッハ、昨春来日)一人で、彼がマークされると動きがとれないという拙攻、ルブキング復帰を望む声がいっそう強くなった。1月末西ドイツ技術委のクランツ委員長がルブキングと話し合うと報じられ、同選手のナショナルチーム復帰を一歩進めるものとして注目を集めている。

グンメルスバッハ 3連勝へ前進……欧州杯

各国チャンピオンチームによる第12回男子ヨーロッパカップはこのほど準々決勝が終了、ベストフォアに史上初の3連勝を狙うグンメルスバッハ(西ドイツ)のほかタトラン・プレソフ(チェコ)、パルチザン・ブジェロバル(ユーゴ)マイ・モスクワ(ソビエト)が勝ち残った。順当な顔ぶれといえるがいずれも苦戦の末の進出、特にグンメルスバッハはオプサル・IFオスロ(ノルウェー)との準々決勝第1戦を13—18で落とし6点差の挽回は不可能とみられた。第2戦は12月19日ウェストファーレンに一万をこす大観衆を集めて行われグンメルスバッハはシュミット、フェルドホフ、ベステベ(いずれも昨春来日)らで着実にリードを奪ったものの5点差がやっと残り1分で18—13と憂色濃かったのだが29分30秒フェルドホフが起死回生の1点をもぎとり19—13。2試合合計点を32—31とし辛くも準決勝へ名のりをあげた(注・2試合の得点が同じ場合は第1戦の勝者が勝ち)。

マイ・モスクワは2回戦でGW・ダンケルセン(西ドイツ)を12—11、13—11で降した余勢をかい準々決勝でもヘルラス・ストックホルム(スウェーデン)を13—9、12—9を連破、エース・マキシモフの好調が目立っている。

ユーゴ、東ドイツおさえる
〜シュエリン・カップ〜

東ドイツ恒例のクリスマストーナメント・シュエリンカップ国際大会は12月19日から6日間シュエリン、ロストック市などで行われた。

参加5ケ国(6チーム)はいずれもすでにオリンピック出場権を獲得した強豪、期待どおりの熱戦がつづいた。

優勝は最終戦のユーゴ×東ドイツにかかり、前日まで全勝の東ドイツが、得失点差勝ちをもくろむユーゴを上廻るとみられたのだがユーゴはラザルヴィックを主軸とした攻撃陣が前半から快調にとばして主導権を握り、東ドイツを押し切って初優勝した。

この大会の得点王は34点をあげたF・ハンセン(デンマーク)、以下ファルック(東ドイツII)、ブルーナ(チェコ)、ロスト(東ドイツ)ガンショウ(東ドイツ)の順。

ユーゴ	20	10—6	10—8	14	チェコ
東ドイツII	18	9—8	9—6	14	デンマーク
東ドイツ	14	8—7	6—5	12	ハンガリー
ユーゴ	16	9—7	7—5	12	ハンガリー
東ドイツ	20	14—6	6—11	17	東ドイツII
チェコ	24	13—7	11—14	21	デンマーク
東ドイツ	14	7—4	7—6	10	チェコ
ハンガリー	13	5—7	8—5	12	東ドイツII
ユーゴ	22	8—8	14—8	16	デンマーク
東ドイツII	13	6—8	7—4	12	ユーゴ

ハンガリー 20（10―13, 10―6）19 チェコ
東ドイツ 15（11―4, 4―5）9 デンマーク
チェコ 11（5―5, 6―5）10 東ドイツII
ハンガリー 18（10―7, 8―10）17 デンマーク
ユーゴ 16（5―8, 11―3）11 東ドイツ

【順位】①ユーゴ4勝1敗（得失点差20）②東ドイツ4勝1敗（10）③ハンガリー④東ドイツII⑤チェコ⑥デンマーク

ユーゴ、好調をつづける
～スウェーデン国際～

その名も「ワールド・カップ」というビッグトーナメントが11月末スウェーデンで行われた。

ヨーテボルグ市350年記念会国際大会がそれで現世界チャンピオンのルーマニア、元チャンピオンのスウェーデンとチェコそれに東ドイツ（世界2位）、ユーゴ（世界3位）ソビエト（世界9位）、スペイン、ノルウェーの計8ケ国という豪華な顔ぶれが集った。

連日五千をこすファンを熱狂させたが結局ノンタイトルのユーゴがルーマニアを降す皮肉な結果となった。ユーゴの主力はラブルニク、ミルコビク。地元スウェーデンは辛くも5位を確保したものの日本遠征後どうも調子がよくない。

ノルウェーが東ドイツと引き分けたのも注目されよう。

▽予選リーグA組
ルーマニア 19―13 チェコ
スウェーデン 20―9 スペイン
ルーマニア 16―14 スウェーデン
チェコ 18―17 スペイン
ルーマニア 25―9 スペイン
チェコ 15―12 スウェーデン

▽同B組
ノルウェー 12（分）12 東ドイツ
ユーゴ 15―11 ソビエト
ソビエト 17―16 東ドイツ
ユーゴ 13―11 ノルウェー
ユーゴ 18―16 東ドイツ
ソビエト 19―13 ノルウェー

▽7位決定戦
ノルウェー 21―14 スペイン

▽5位決定戦
スウェーデン 15―12 東ドイツ

▽3位決定戦
ソビエト 15（7―7, 8―5）12 チェコ

▽決勝
ユーゴ 17（8―5, 5―8, 2―0, 1―0）14 ルーマニア

東ドイツ第2チーム勝つ
～トビリシ・トーメント～

恒例のトビリシ（ソビエト）国際トーナメントは12月ギオルギェで行われ、東ドイツ第2チームが延長の末ルーマニアBを破って優勝した。

ブルガリアとオランダ以外は各国とも若手中心のナショナルチームを参加させた。東ドイツ第2チームはシュエリンカップ（前掲）でもユーゴ、デンマークなどを破っており同国の選手層の厚さを物語っている。

▽予選リーグ主な成績
ルーマニアB 18―17 東ドイツII
ユーゴB 19（分）19 ウクライナ
ルーマニアB 22―12 オランダ
東ドイツII 21―20 ソビエト新人
ギオルジェ 21（分）21 ブルガリア

▽準決勝
東ドイツII 18（7―6, 11―11）17 ユーゴB
ルーマニアB 20（8―7, 12―7）14 ギオルジェ

▽3位決定戦
ユーゴB 23（8―12, 15―8）20 ギオルジェ

▽決勝
東ドイツII 17（5―7, 7―5, 3―2, 2―0）14 ルーマニア

アメリカ、欧州を転戦

積極的な強化にのりだしたアメリカは11月末からナショナルチームをヨーロッパへ派遣した。オリンピック予選（別掲）に備え着実に力を伸ばしている感じである。

スイス 28―17 アメリカ
アメリカ 19―15 ベルギー
ルクセンブルグ 19―17 アメリカ
アメリカ 23―21 パリ選抜
アメリカ 28―18 パリ西選抜
アメリカ 17―16 オーストリア
オーストリア 20―14 アメリカ

都市対抗でパリ市勝つ

国際4都市対抗は1月西ベルリンで行われアグーニュ、リラルジエ、リグナクらナショナルプレーヤーを中心としたパリ市が地元ベルリン市をおさえて優勝した。

国際都市対抗が開かれたのは久しぶりのこと。

ベルリン市（西ドイツ） 9―4 チューリッヒ市（スイス）
パリ市（フランス） 12―5 ストックホルム市（スウェーデン）
ストックホルム市 11―5 チューリッヒ市
パリ市 7―5 ベルリン市
チューリッヒ市 9―8 パリ市
ストックホルム市 8（分）8 ベルリン市

【順位】①パリ市②ベルリン市③ストックホルム市④チューリッヒ市

ルーマニア×チェコ戦

チェコはこのほどプラハにチャンピオン・ルーマニアを招き2試合を行ったが勝ち星はあげられなかった。グルイア（ルーマニア）は2試合で9点をあげていぜん健在ぶりを発揮、チェコではコネクニイが8点をマークした。

ルーマニア 10（3―5, 7―5）10 チェコ
ルーマニア 12（6―6, 6―5）11 チェコ

福岡は西南、愛知は名城大勝つ

第5回福岡県8大学秋季リーグ戦はこのほど福岡・西南学院球技場で行われ、西南学院が岩原、牧目野、近藤らの速攻とGK高田の堅守で勝ち星を重ね全勝優勝した。

福岡大 14－10 久留米工短大
東海 14－11 九州大
福岡教大 24－6 久留米工短大
福岡教大 17－6 福岡工大
西南学院 14－11 九州産大
福岡大 21－12 福岡工大
福岡教大 17－4 九州産大
福岡大 22－7 九州大
久留米工短大 17－15 福岡工大
西南学院 18－6 東海
久留米工短大 12－9 九州大
九州産大 18－9 福岡工大
西南学院 14－9 福岡大
福岡教大 23－7 東海
九州産大 25－11 久留米工短大
福岡工大 20－14 東海
九州産大 34－12 九州大
福岡大 21－11 東海
西南学院 26－6 九州大
福岡教大 11－8 福岡大
西南学院 24－8 久留米工短大
福岡工大 12－10 九州大
九州産大 22－8 東海
福岡教大 15－7 九州大
久留米工短大 14－12 東海
西南学院 13－8 福岡教大
九州産大 13－12 福岡大
西南学院 14－6 福岡工大

【順位】①西南学院7戦全勝②福岡教大6勝1敗③九州産大5勝2敗④福岡大4勝3敗⑤久留米工業学園短大⑥福岡工大⑦東海⑧九州大

▽ベストセブン　GK高田（西南学院）　FP岩原、牧、目野（以上西南学院）、和宮（福岡大）、井上（九州産大）、池田（福岡教大）

中京の12連勝成らず

第12回愛知学生選手権は12月4日から8日まで名古屋市体育館、男子9校16チーム、女子3校4チームが参加して行われた。

男子は準決勝で12連勝を狙う中京が名城の鋭い攻撃に敗れ、結局名城が初優勝、女子は中京が中京女二チームを連破して4年連続5度目の優勝を飾った。

▽男子1回戦
中京 25－7 南山
名大 16－10 愛知大
名工大 13－11 名大B
南山B 15－10 名工大B
名城 19－9 愛知教大
愛知教大B 24－11 愛知工大
中部工大 14－9 愛知大B
名城B 22－11 中京B

▽同準々決勝
中京 30－1 名工大A
名大 14－13 南山B
名城 23－9 中部工大
名城B 16－9 愛知教大B

▽同準決勝
名城B 9（6－1、3－5）6 名大
名城 12（6－3、6－8）11 中京

▽同3位決定戦
中京 18－8 名大

▽同決準
名城 12（6－7、6－1）8 名城B

▽女子1回戦（＝準決勝）
中京 5（1－2、4－1）3 中京女
中京女B 13（6－3、7－1）4 愛知教大

▽同3位決定戦
中京女 10－6 愛知教大

▽同決勝
中京 10（4－4、5－5……1－0、0－0）9 中京女B

▽交歓試合（女子）
愛知教員ク 7（分）7 中京女大

九州産大、福岡教大降す

▼福岡県学生新人戦（11月・東海大体育館）

▽準々決勝
九州産大 19－7 九州大
福岡大 15－8 西南学院
久留米工大 16－7 福岡工大
福岡教大 16－5 東海

▽準決勝
九州産大 16－7 福岡大
福岡教大 14－7 久留米工大

▽3位決定戦
福岡大 20－13 久留米工大

▽決勝
九州産大 13（6－3、7－8）11 福岡教大

各地の記録

北海道大が2連勝
女子は室蘭クが優勝

第11回全北海道室内選手権は12月25、26日の2日間札幌市の中島スポーツセンターに男子12、女子4チームを集めトーナメントで行われた。

男子は準決勝の北大×函館有斗OBが〝事実上の決勝〟といわれるにふさわしい激戦となり、わずかにスピードに優る学生1位の北大がクラブチャンピオンの函館有斗OBに押し勝ち、決勝でも室蘭クに快勝、2年連続3度目の優勝をとげた。

女子は室蘭クが攻守に一日の長を示し勝った。

▽男子1回戦
北見工OB 棄権 室蘭工大
北海道大 24－8 青紫ク
カルルス・ク 棄権 小樽商大
エルム・ク 14－13 室蘭東OB

▽同準々決勝
室蘭ク 16（－、－）15 エルム・ク
函館有斗OB 20（9－2、11－9）10 北見工OB
北海道大 17（7－5、10－6）11 紋別ク

函館大谷ク　26（14－5　12－7）12　カルルスク
▽同準決勝
北海道大　15（－　－）13　函館有斗OB
室蘭ク　13（－　－）12　函館大谷ク
▽同決勝
北海道大　23（20－5　13－4）9　室蘭ク
▽女子1回戦（＝準決勝）
函館選抜　19（9－1　10－1）2　紋別北高
室蘭ク　7（－　－）4　室蘭OG
▽同決勝
室蘭ク　9（4－1　5－3）4　函館選抜

高校男子は有斗が優勝

▼昭和46年度全北海道高校男子新人戦（12月・札幌）
▽1回戦（3試合）
紋別北　23－3　札幌月寒
札幌商　棄権　北見工
室蘭工　19－6　札幌啓成
▽同準決勝
函館有斗　7－5　紋別北
室蘭工　17－5　札幌商
▽同決勝
函館有斗　7（3－3　4－3）6　室蘭工

中頭、那覇商OB制す

▼第2回沖縄選抜大会（11月・沖縄工）
▽男子1回戦（1試合）
琉球大　12－6　国頭
▽同準決勝
中頭　15－10　沖縄大
那覇商OB　17－13　琉球大
▽同決勝
中頭　20（8－2　12－10）12　那覇商OB
▽女子決勝
中頭　18（10－0　8－2）2　東女体大沖縄OG
▽高校男子決勝
沖縄　21（10－10　11－5）15　北農
▽同女子決勝
小禄　10（2－3　8－2）5　浦添

日本発条が3戦全勝

▼神奈川県実業団リーグ（12月・横浜）
日本発条　17－13　日進商会
セントラル自動車　19－15　日本鋼管
日本発条　21－13　日本鋼管
セントラル自動車　20－10　日進商会
日本鋼管　16－11　日進商会
日本発条　16－12　セントラル自動車
【順位】①日本発条②セントラル自動車③日本鋼管④日進商会

三部18クラブが参加

▼第12回愛知クラブリーグ（11月名古屋）
▽1部
愛教ク　11（分）11　桜丘会
名城ク　24－13　名大ク
大江ク　16－12　愛教ク
桜丘会　18－10　大江ク
桜丘会　25－14　名大ク
名城ク　24－13　東山ク
桜丘会　26－19　東山ク
名城ク　28－12　大江ク
愛教ク　18（分）18　名大ク
東山ク　20－12　大江ク
愛教ク　20－10　東山ク
大江ク　24－12　名大ク
名城ク　20－14　桜丘会
東山ク　19－18　名大ク
愛教ク　13－12　名城ク
【順位】①名城ク4勝1敗②桜丘会3勝1敗1分③愛教ク2勝1敗2分④東山ク・大江ク2勝3敗⑥名大ク4敗1分
【2部順位】①東海ク4勝1分②南山ク4勝1敗③桜丘会B④佐織ク⑤愛商ク⑥中川ク
【3部順位】①愛工ク②東海クB③松蔭ク④昭和ク⑤一宮ク⑥若松ク

日本ビクター貫録勝ち

▼第21回茨城県総合（女子）選手権（11月・水海道二高）
▽準々決勝
水海道二OG　14－4　西峰ク
鉾田二高　10－6　茨城大
水海道二高　8－5　太田二高
日本ビクター　17－8　八郷高
▽準決勝
鉾田二高　11－8　水海道二OG
日本ビクター　21－3　水海道二高
▽決勝
日本ビクター　28（13－1　15－3）4　鉾田二高
（注）男子の記録は前号既報

新居浜工、強味示す

▼愛媛県高校新人大会（11月・今治）
▽男子準々決勝
新居浜工　12－2　松山北
松山東　13－4　松山南
今治西　15－8　新田
松山工　19－7　今治南
▽同準決勝
新居浜工　5－4　松山東
松山工　18－4　今治西
▽同決勝
新居浜工　7（4－3　3－3）6　松山工
▽女子準々決勝
松山商　8－3　新居浜東
新居浜商　12－1　今治南
東温　13－4　西条
土居　17－0　今治西
▽同準決勝
松山商　7－4　新居浜商
土居　8－2　東温
▽同決勝
土居　6（3－2　3－0）2　松山商

お詫び

93号、編集部の手違いから、ベアー株式会社の広告が脱落しておりました。お詫び申し上げます

編集後記

遅ればせながら、おめでとうございます。本年もどうぞよろしく。

本年も様々なことが多い年でしょう。

懸案・難問が山積しているハンドボール界ですその一端はポスト・アジア予選という形でとりあげました。これのなかでどの一つをとっても、すこぶる難問です。ハンドボール協会の執行部がいい意味でのリーダーシップをとらなければならないのはいうまでもないことですが、盛りあがる力がなければどうなにものでもないことばかりです。

ミュンヘン、底辺拡充、女子問題、日本リーグ等々山積するのは難問ばかりです。

編集部でも、それらに少しでも役立ちたいと考えています。

ポストアジア予選でとりあげた問題について、ほかのいかなる問題でも、どしどし投稿が欲しいところです。

特に〝底辺拡充策〟について積極的、具体的提言をどんどん寄稿していただきたいと考えます。

〝底辺拡充策〟盛りあがる力なくしては解決できない最大の問題です。投稿・寄稿で体験、提言を本誌で多くの人々に紹介していきたいと考えています。よろしく

（T）

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第九十四号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十七年一月二十五日印刷 昭和四十七年二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京[illegible]谷区神南一ー一ー一
電話 [illegible]代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円（年間購読11回・千二百円）